

## 原子カムラの境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

### 第1回業務推進全体会合

#### 逐語録

(木村<sup>浩</sup>) それでは、第1回の全体会合を始めたいと思います。

はじめに、資料の確認を行ないます。議事次第が一番上に置いてあると思います。1-1が業務計画書です。1-2が新規項目追加理由書です。1-3が、パワーポイント資料になります。1-4がスケジュール表です。

2-1が、社会調査コアグループ議事メモ。2-2、2-3は、市民と専門家に対する調査票になります。エネルギーと原子力に関するアンケートと書いてある資料です。

3-1が、フォーラム検討会議の第1回議事案です。最後に、3-2が「コミュニケーション・フィールドの調査」というパワーポイント資料です。本日の配布資料は以上になりますけれども、よろしいでしょうか。

それでは、原子カムラの境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行、第1回の、「業務推進全体会合」と名前をつけることにしました。基本的には、昨年度まで社会調査を継続していた特別専門委員会のメンバーと、フォーラムの検討をするメンバーの合同会合ということになっておりますので、よろしく願いいたします。

#### 0. 自己紹介

(木村<sup>浩</sup>) 議事に入る前に、一言ずつ自己紹介をしていきたいと思います。

それでは私から。東京大学の木村と申します。原子カムラの境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行の研究業務の代表を務めさせていただきます。これからいろいろとご協力いただくと幸いですけれども、よろしく願いいたします。

(自己紹介のため、略)

(木村<sup>浩</sup>) ということで、一通りご紹介いただきました。まだ他にも本来はメンバーがいらっしゃるのですが、都合がつかないということで、第1回はこういうメンバーで進めていきます。

では、議事に従って会議を進めていきたいと思います。今日の議題は大きく3つです。

1番目に、本業務の概要説明ということで、資料1-1から1-4を使って、私から説明いたします。

次に、社会調査グループの進捗報告ということで、2-1から2-3の資料を使って、社会調

査の進捗状況を報告していただきます。こちらは土田先生に中心になっていただきます。

次に、フォーラム検討グループ進捗報告ということで、神崎さんからお話をいただきます。資料は3-1、3-2です。

## 1. 本業務の概要説明

(木村<sup>浩</sup>) それでは、早速概要説明に入りたいと思います。

資料1-1が業務計画書です。こちらを文科省に提出して、契約を結んでいるということになります。この資料を使って、何をするのかということをご説明しておきたいと思っております。

まず業務の題目は、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」です。

業務の目的。このプロジェクトは、年度ごとに進行しますが、3年間のプロジェクトで立てておりますので、3年間を通しての目的がこちらに書いています。市民と専門家に対する社会調査をベースとしたコミュニケーション・フィールド（「フォーラム」と呼ぶ）を構築し、参加者への意識調査から、フォーラム参加によるダイナミックな意識・態度・信頼の変容を明らかにするとともに、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの枠組みおよび要件を見出すことを目的とする、と書いてあります。非常にさっぱりした書きぶりになってはいますが、こちらについて、背景などを後ほどご説明いたします。

当該年度における成果の目標及び業務の方法。(1)が社会調査の実施です。こちらは原子力学会に再委託しておりまして、土田先生に中心になってやっていただく部分になります。

①社会調査項目の作成。原子力学会に特別専門委員会を設置し、エネルギーや原子力に関する意識を測定する質問項目を検討する。また、フォーラム参加者を決定するための市民および専門家への調査票および依頼状を作成する。

②市民および専門家への社会調査の実施・分析。(1)①で作成した調査票を用いて、市民の代表として首都圏住民(回収数500名)、および、専門家の代表として原子力学会員(回収数500名規模)に対してアンケート調査を実施し、結果を分析する。また、公正のために、アンケート調査結果の概要はホームページで公開する。

③フォーラム参加者への意識測定項目の作成。(2)①で整理したコミュニケーション・フィールドの関連研究を基に、フォーラム参加者のダイナミックな意見・態度・信頼の変化を測定するための仕組みを開発する。これが社会調査グループの仕事になります。

次に(2)フォーラムの設計です。こちらはNPO法人パブリック・アウトリーチに委託している部分で、神崎さんに中心になっていただきます。

①コミュニケーション・フィールドの関連研究整理。既往のコミュニケーション・フィールドの関連研究を整理し、現状と課題を分析し、課題を解決する策を提案する、ということ。

②フォーラムの設計。(2) ①で提案した課題解決策を基に、フォーラムの運営方針と具体的方法を詳細に検討し、その過程を記録する。その上で、フォーラム議題、全 5 回のスケジュール、講師、ファシリテーターを決定し、運営マニュアルを作成し、フォーラム開催に向けて入念に準備する。また、フォーラム参加者の決定基準を作成する。

③フォーラム参加者の決定。(1) ②の分析結果および(2) ②のフォーラム参加者決定基準を用いて、フォーラムの参加者を決定する。具体的には、原子力に対する賛否、安全性に関する考え方等を考慮して、原子力に対する考え方のバランスが取れるように、市民の代表 10 名程度と専門家の代表 10 名程度を決定する。ということになっています。

(3) は、情報の共有および成果の取りまとめ。(4) は外部評価になります。

続いて、スケジュールについて説明します。最後のページに業務実施計画があります。どのくらいのスケジュールで行なうかということが書いてあります。これを少し細かくしたものが、1-4 の資料になります。こちらもあわせて見ていただければと思います。

まず社会調査に関してです。社会調査の項目の作成は、12 月上旬から中旬ぐらいにかけて、調査票を確定したいということになります。12 月の末に調査会社に正式なデータを送って、1 月中に調査を実施してもらおうということになります。

社会調査のほうは、原子力学会に再委託しているという関係もあって、2 月までに全ての結果を出すことになっています。タイトなスケジュールですけれども、社会調査を実施した後の分析は、2 月に行なうことになります。

それと並行して、1 月から 2 月にかけて、フォーラム参加者への意識測定項目の検討、来年のフォーラム開催にあたって、どういう項目で参加者の検討を行なうかというのを決めていただくことになります。

続いて、フォーラムの設計に関してです。まず、10 月 11 月で、コミュニケーション・フィールドの調査を実施しています。これは東大で技術補佐員として仕事をしてもらっている竹中君に調べていただきました。今日はその進捗を後半に話してもらおうと思っています。

それと並行して、来年度に開かれるフォーラムの概要の検討を行いたいということです。こちらの概要が、12 月上旬までにある程度決まり、その結果を社会調査グループに送ることになります。それが縦に結ばれている点線になります。調査グループは結果を受け取って、調査票をまとめて、調査実施に間に合わせる必要があるということになります。

それが終わった後に、フォーラムの詳細検討、マニュアル作成を行なっていきます。また、社会調査の結果が上がってきたところで、フォーラム参加者を確定することになります。

こちらにも再委託している関係上、2月までに一通りの業務を完了させることとなります。ただ、(2)は東大でもやっていますので、東大のほうで持てる仕事はそちらでも行なうこととなります。

(3)のとりまとめに関しては、東大で行ないます。今日の会合は、このとりまとめに関する業務ということになります。本日は、(3)の赤い三角という位置づけになります。

(4)の外部評価は2回行なう予定です。第1回は12月の頭に日程が確定しています。第2回は3月に行なうことになっています。

続いて1-2の資料ですが、外部評価委員会などを加えましたので、それに対しての理由追加書になります。これは参考資料ということで、お渡ししているものです。

詳しい中身に関しては、この後10分くらい時間をとって説明したいと思いますが、ここまでで何かご質問があればお受けしたいと思います。いかがですか。

—— 題名なのですけれども、原子カムの境界を「越える」ということですよ。ということは、原子カムの存在を前提として、コミュニケーション・フィールドをどうするかという議論をするということですか。原子カムの境界を取り払うという議論ではなく、原子カムはどうしても存在するという前提での議論ですよ。

(木村<sup>浩</sup>) その点については、この後どのように考えているのか、少しお話しします。ムラということをどのように今考えていて、どの部分を突破しようとするか、ご説明したいと思います。でも、基本的には、ムラを無くすのはおそらく無理だと思っています。

—— その議論ではなくて、あることを前提にして、いかに越えていくかということですね。

(木村<sup>浩</sup>) はい。越えていくし、そこをもう少しならかなものにしていくことが、中心的議題かなと思います。

他はいかがでしょうか。それでは、内容に関して簡単に説明したいと思いますので、資料1-3をご覧ください。

原子力基礎基盤戦略研究イニシアチブというタイトルの下に、全部で5件のプロジェクトが採択されたわけですが、それを横でつなぎましょうということで、元東大の、現在は事業構想大学院大学の岩田先生がプログラム・オフィサー(PO)として入って来て、全体を見てくださっています。岩田先生の発案の下、プロジェクトを横でつないで、研究の意見交換をしましょうというワークショップを開いております。10月12日に開催されたのですけれども、そのときの説明資料として用意したものが1-3になります。

(スライド1) 研究として入っていただいているメンバーは、ここに挙げてある7名です。土田先生には原子力学会の委託先のとりのまとめとして入っていただいています。神崎さんにはコミュニケーション・フィールドの代表として入っていただいています。諸葛先生には東京大学の一員として、フォーラムの設計に関わっていただいています。篠田さんと別府先生には、原子力学会のほうに加わっていただいている。久保さんも、PONPOの一員として、コミュニケーション・フィールドのほうに加わっていただいているという状況です。いろいろ重なりはありますけれども、こういう形で研究の体制を作っております。

(スライド2) では研究の中身の話です。まず背景として2つ考えております。

1つは「原子カムラ」というものです。研究のタイトルにも冠していますが、これが何なのかということ、少なくとも本研究においてどのように考えているのかということをご説明します。今のご質問に答える形になると思います。

まず、そもそも以前から、原子力発電所に代表される社会的忌避感を内包する施設（迷惑施設）と社会とが適切な関係性構築を迫られる場面において、市民と専門家の当該技術に関連する認識のギャップは、それを阻害する大きな要因のひとつとして古くから指摘されてきました。これは原子力発電所も、高レベル放射性廃棄物の処分場もそうですし、今後除染廃棄物の中間貯蔵施設や最終処分施設においてもこういう場面が現れてくるだろうと考えております。

同時に、福島原子力発電所事故以降、世間一般から「原子カムラ」という言葉がよく聞かれるようになってきています。現に、社会からそう呼ばれているのは事実であると思います。

そこで、なぜ社会から「ムラ」と認識されるのか。今回取り扱うのは、内部の組織がどうというよりは、世間から見たときに「ムラ」というものがどのように認識されていくのかということに焦点を当てているということになります。

したがって、「ムラ」を形作るのはムラ内部の構成員の凝集力ばかりではなく、ムラ内部と世間との相互作用によって、その2者間に境界が生じたのではないかと。境界をお互いが作り上げている状態というのが、ひとつの考え方としてあるのではないかと。したがって、「原子カムラ」とは、市民と専門家の相互作用によって作り上げられた、2者間のギャップそのものであると捉えられるのではないかと、ということです。これはまだ仮説ではあるのですが、この仮説に基づいて、本研究を構想したということになります。

(スライド3) 2つ目の背景は、従来型コミュニケーションの限界ということなんです。

市民と専門家との間は、情報の偏りが大きいことは否定できない。この2者間のコミュニケーションについて、市民の声を聞くことこそが大切、市民をパートナーとして扱うことが大切など、多くのコミュニケーション専門家が指摘してきたにも関わらず、実際に行なわれているコミュニケーションの場では、この情報の偏りが存在するために、どうして

も専門家から市民への情報提供が主なものとして実施されてきた、と考えております。これが悪いと言っているのではなくて、これには一定の意義があったとは思っていますが。

しかし、福島以降、社会的コンテキストが変わり、と書いています。要は、原子力に関わっている専門家に対して、信頼感が大きく失われた状況においては、従来と変わらないコミュニケーションを実施しても意味がないだろうと。「原子力ムラ」からの情報が信頼されないということ。そのために、発信された情報の価値が受け手側ではゼロに等しく、情報提供型のコミュニケーションは何の意味も持たない。

少し強調して書いていますけれども、かなりこういう場面が見受けられるのではないかと考えております。必ずしも 100%こうなっているわけではないというのは重々承知ではありますけれども、こういう状況にあることが指摘できると考えているということです。

(スライド 4) 続いて、本研究の必要性・研究目的になります。

したがって、現在、「原子力ムラ」を、内（原子力専門家）から外（市民）から「協働」して、壊していけるような取り組みが必要とされているのではないだろうかということです。従前は、ムラ内をどうすればいいか、もしくは、ムラ外がどうなっているのか、という、ダイナミズムを考慮しない取り組みがほとんどでした。このダイナミズム、さらにある意味ではムラ内がどのように変わっていけるのかということに焦点を当てた研究というのはなかなかないのが実状です。こういうところに必要性、さらには新規性があると考えております。

この目的を達成するためには、市民と専門家が対等な立場で、お互いの間のギャップとはそもそも何なのか、なぜそれが生じたのかを、知識、情報量、経験、社会的立場、価値観、人生観等までを含んだ、お互いのコンテキストを共有し、お互いに尊重することを可能とする仕組みが必要なのではないかと、ということです。

そこで本研究では、市民と専門家が対等な立場で、お互いの間のギャップを深く認識し、尊重しあえるようなコミュニケーション・フィールドを提案・試行したいということです。

それを通して、2者の相互作用によるダイナミックな変容のプロセスを明らかにし、このような変容が起こりうる条件を明らかにする。これをもって、今必要とされているコミュニケーション・フィールド構築のための実効的な示唆を得ることを目的としたい。以上を研究の目的にしております。

(スライド 5) 続いて、実施内容の概要を説明します。先ほどは、業務計画書に沿って説明しましたが、実際にはどういうことをするのか、ここでまとめています。

具体的には、討論型世論調査（deliberative poll）の手法を参考にして、あくまで参考なのですけれども、

1番、市民（首都圏住民 500名規模）と専門家（原子力学会員 500名規模）に対する社会調査を実施し、

2番、これをベースとしたコミュニケーション・フィールド、これは原子力に対する賛否、安全性に関する考え方等を考慮して、原子力に対する考え方のバランスが取れるように、一般市民および専門家から10名程度ずつ選出して、「フォーラム」とします。計20名の参加者がいるフォーラムです。その他に、ファシリテーターが適切に配置されることとなります。このフォーラムを構築して、

3番、フォーラムを実施する。これが本研究の一番中心的な出来事になると思います。

その後、フォーラム参加者への継続的な調査を実施し、市民はもちろん、専門家側の意見形成（意見変容）プロセスを同時に見ることができ、コミュニケーションによる市民と専門家の相互作用をダイナミックに捉える、ということになります。

今年度は、2番のフォーラムの設計までということになります。次年度、フォーラムを実施します。そして、もう1回調査を行ない、第2サイクルを行なうという計画になっています。

（スライド6） このスライドでは、全体の計画が時間軸と共に書いてあります。

少し見にくいですので、ポイントだけ述べます。フォーラムの設計、コミュニケーション・フィールドの実行、そして効果検証、というのが1サイクルとしてセットされていますけれども、これを2サイクル行なう予定であるということです。

なぜ2サイクルかということ、私はコミュニケーション・フィールドに関する社会実験を今まで何回か行なっているのですが、1回目というのは基本的には予備実験みたいなもので、いきなり成功するのは難しいということを経験的に考えているということです。したがって、1サイクル目でフォーラム運営のための知見をしっかりと確定していくことを念頭において、2サイクル入れているということになります。

（スライド7） 体制については、先ほどから説明していますが、図示するとこうなっているということです。

（スライド8） 社会的貢献については、今回は省略します。あとで目を通していただければと思います。

ということで、内容に関して簡単に説明しましたが、ご意見、不明点等いただければと思います。よろしくお願いいたします。

—— まず「原子カムラ」の定義をなさることが必要なと思います。

原子カムラと呼ぶ人は、何を原子カムラと呼んでいるか、でも構いません。あるいは、もう少し内省的な理解といいますか、ムラ人とでもあえていいましょうか、「ムラ人」たちは原子カムラをどのように理解しているか。理解というか、定義の話ですね。おそらく、外側から見た話と内省的な理解との間にはギャップがあると思います。その部分がひとつの

幻想としてあるのではないだろうかと思います。

まずムラの定義をきちんとしないと、背景 2 以降の話が崩れていく可能性がありますので、そこをまず押さえる必要があると思います。

(木村<sub>浩</sub>) 重要なご指摘だと思います。

(土田) 概念的に押さえるのも重要だと思います。

それに加えて、後で議論させていただきますけれども、市民が「ムラ」をどうイメージしているか。学会員が自分たちの「ムラ」をどうイメージしているか。こういうことを調査で聞いて、そこから定義というか、像を浮かび上がらせることもできるのではないかと考えています。

—— おっしゃるとおりです。だから、ここでいう「ムラ」は、あくまでも暫定的なもので構わないと思います。本格的な定義ができれば、この研究はもう終わったということになります。

(木村<sub>浩</sub>) そうかもしれないですね。

—— せっかく「原子カムラ」が冒頭に出てくる業務なので、あちこちの定義を最初に集めてみるのもいいのではないのでしょうか。

去年の 9 月に学会で発表されたときにまとめられた原子カムラの定義みたいなものも、そのうちの 1 つとして、ぜひ提供していただいて。あちこちで書かれていると思うのです。朝日新聞の定義はどうなのかとか。そういうものを集めてみるだけでも、面白いかもしれない。

(木村<sub>浩</sub>) そうですね。それは非常にいい業務になると思います。

—— 一言だけ。私の定義は基本的には、「社会的アクターのひとつであり、原子力推進を旨とする意見集団」で尽きると思います。ただし、社会的に「ムラ」という言葉が強調されるときには、一種の閉鎖性や、社会とのコミュニケーション不全を強調した、ややネガティブな、蔑視的な表現である。そういう定義で私は書いております。

(木村<sub>浩</sub>) ありがとうございます。このプロジェクトでは研究補佐員として竹中君を採っていますので、その点を調査するよう私のほうで指導したいと思います。いろいろまとまってきたら、また報告したいと思います。



—— インターネットで検索すれば、たくさん出てくると思いますね。

—— 私は、今日この会合に初めて参加させていただいて、今のような意見交換ができるのは素晴らしいことだと思って伺っておりました。

今回、「原子カムラ」を研究のタイトルに据える。それも専門家の方が据えるということがとても斬新だと思って、私は参加をいたしました。

それで、私がどのように理解していたかということ、やはり専門家と一般社会が持っている原子力に対するイメージがあまりにも違う、そのところを、なぜそうなるのか、そしてそれをもっときちんとしたコミュニケーションが成り立つようにするにはどうしたらいいのかを、本音で研究していこうという話なのだろうと思って、自然に好意的に受け取って、とにかく参加をしております。

今の先生のお考えが非常に明解で、非常に分かりやすく、とりあえずそういう基本認識で、これからそのギャップとかを皆で取り外すために、どういうことが必要なのかということをお話していただけるということに、とても期待を持たせていただいています。コメントだけですみません。

(木村<sub>浩</sub>) いえ、どうもありがとうございます。ぜひご協力いただければと思います。

—— 今更なのですが、「ムラ」をカタカナにしたのは、社会一般でこういう使われ方をしているからなのですか。それとも、何か意味があっつけたのですか。

(木村<sub>浩</sub>) これが一般的かなと思ってつけたのですけれども、それほど一般的ではないようです。カタカナで使うのいくつか見ていたので、カタカナでつけたのですが。

—— 私は、「ムラ」という字をカタカナにしたのは、今おっしゃったようなネガティブな印象があるから、あえてカタカナにしたと私は思っていたのですが。

(木村<sub>浩</sub>) 基本的にはそういうことです。記事とかそういうところにはこういう書かれ方をするので、あえて使ったということです。

—— 追加でひとつお伝えをしておきたいのが、実は私たち元気ネットは、「ごみ」という字を、あえてひらがなを意識して使っているのです。カタカナではなく、ひらがなを使うというところが、そういう意識があっあえてそれを使うようにしているのです。15年ぐらい前には、「ゴミ」という使われ方が多かったのですが、そうではなくて、マイナスでないイメージを持ちたいということで、そこにはこだわっています。それと共通するものがあるのかなという思いで質問をさせていただきました。

(木村<sub>浩</sub>) それはあるかもしれません。このカタカナの「ムラ」が、ひらがなの「むら」になったほうがいいのかもわからない。

—— だから私も、今のネガティブというお話を伺ったときに、何年か後に、これがひらがなの「むら」になる、というイメージなのかな、と考えていたのです。

(木村<sub>浩</sub>) 貴重なご意見をありがとうございます。方向性が見えてきた気がします。

—— それも含めて調べてみると面白いですね。

(木村<sub>浩</sub>) そうですね。

—— 非常に事務的なコメントなのですが、1-1 と 1-3 と 1-4 で、(1)、(2) のタイトルの表現が違うのですよ。これは統一したほうがいいんじゃないかと思うのですが。

(木村<sub>浩</sub>) おっしゃる通りです。ありがとうございます。ただ、実は裏事情もありまして。

まず、1-4 は、私が記憶をたどって作った資料なので、統一しなければいけないと思います。

1-3 の体制表は、3 年間通しての体制表です。一方で 1-1 は、あくまでも今年度の業務として書かれています。例えば原子力学会の業務は、1-1 では「(1) 社会調査の実施」になっています。一方、1-3 のスライド 7 では「(1) 意識調査・分析」になっています。この差は、今年度業務か 3 年間の業務かの違いです。

今年度はフォーラム設計までなので、原子力学会の業務は社会調査までです。次年度からはフォーラムの実施に変わります。原子力学会の業務も、社会調査に加えて、参加者の意識調査も入ってきます。ですから、来年度の業務は、1-3 のスライド 7 の通りになると思います。1-1 はあくまでも今年度の業務なので、社会調査と書いてあるのですね。実はそういう裏もあります。

—— 全体のデザインの話なのですが、背景 2 のところだと、情報の非対称性があるから、これを越えるためには、書いてはいないのですが、基本的には参加や協働が必要なのだろうという意識が、背後に流れていると思うのです。

そのために、まず前提として世論調査をやる。これは実績があるから、ほとんど心配しておりません。そして後半でフォーラムを実施するという流れだと思うのです。

そのフォーラムのところなのですが、これまでの先例として、コンセンサス会議とか、討論型世論調査がありますが、違うのは、このフォーラムは一般市民と専門家が 10 名ずつ

とあります。それは2つのグループになるのですか。どういうイメージなのですか。

(木村<sub>浩</sub>) 20人のグループになるということです。

—— コンセンサス会議や未来会議でよくやっている、一般市民に専門家が、ではなくて、一緒にやるということですか。

(木村<sub>浩</sub>) 後半で、竹中君がまさにその話をすると思います。今までは「市民参加」が中心的な議題だったところに、そうではなくて、私のイメージとしては、専門家も参加しましょう、というイメージです。市民と専門家が共に参加するフィールドを作りたいというところが、チャレンジングなところですよ。

—— 分かりました。

—— 今のお話で非常にイメージが明確になったのですが、私も質問をしたかったのはそこだったのですね。

スライド6、7などを拝見していて、やはり一番大変になってくるのは、フォーラムをどう運営するかということだと思います。ですから、ここで同じように1行で書いているところの意味が全然違うかなと思いつつ伺っていました。

参考になればと思うのですが、最近社会で話題になった討論型世論調査がありますが、私はそれに関わり深く関わっておりました。そのときの思いなども活かしていただきながら、やっていくのがいいかな、と思っています。

やはり実際に中で体験すると、思うことがいろいろあります。ただし、あの方法とはかなり違う方法を探ろうとされているのが今分かってきましたので。

やはり、どのように情報を伝えるかとか、その辺りが大きく影響してきます。あの討論型世論調査では、そういうこともかなり配慮したはずなのですが、なかなか難しい場作りでした。今回は、専門家の方と一般の方が一緒になってコミュニケーションするという、その場をどう作っていくのが、非常に大切かなと思いつつ伺っていました。

(木村<sub>浩</sub>) そこが肝だと思っています。

—— 何かいろいろ、楽しそうな感じがします。

(木村<sub>浩</sub>) はい。よろしくお願ひいたします。討論型世論調査のノウハウなども共有していただければと思います。

—— 運営側というよりは、コメンテータとして中に入っていました。参加者の皆さんから質問を受けて答えるという立場で参加をしました。

(木村<sub>浩</sub>) その話も、今日は無理かもしれないですけど、またいずれフォーラム検討会議の中でお聞かせいただければと思いますので、よろしくお願いします。

—— 先ほどの質問の続きで恐縮なのですが、1-3のスライド6は全体の計画を表している。業務計画書は今年度の計画が書かれている。今年度は、サイクル1の plan という欄の、社会調査およびフォーラム設計が行なわれる。そういう理解でいいのですか。

(木村<sub>浩</sub>) そういうことです。

—— スライド6なのですが、社会調査およびフォーラムの設計と1つの欄になっているのですが、これはそれぞれの欄に分けて、(1)の2012年度、(2)の2012年度というような形で整理していただければありがたいです。

そして、スライド7は、今年度だけではなくて、全体を意味しているのですね。

(木村<sub>浩</sub>) そういうことです。

—— だんだん分かってきました。ありがとうございます。

(木村<sub>浩</sub>) 今後も会議は何回も続いていきますので、また分からなくなったら、ぜひご質問いただければと思います。それでは、1時間とってしまいましたので、次の議題にいきたいと思います。

## 2. 社会調査グループ進捗報告

(木村<sub>浩</sub>) 次は、社会調査グループの進捗報告ということで、土田先生に中心になってご説明をいただいて、ディスカッションしたいと思います。1時間ぐらいとりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(土田) では、お疲れでしょうけれども、休憩なしに進めさせていただきます。

資料としては、2-1 から 2-3 までになります。2-1 が全体のことを書いたメモ書き。2-2 は、第5回を消して第6回となっていますが、一般市民向けに昨年度実施された社会調査の調査票を、今年度用に修正したものです。2-3 が、同様に、学会員向けの調査票を変えた

ものです。

調査そのものは、2-2と2-3を見て分かるように、すでに5年、あるいは6年原子力学会のほうで行なってきたことを踏襲する形になります。

今回から少し話がややこしくなるのが、もうひとつ別のミッションが加わったということになります。フォーラムと社会調査が連動することになりました。どう連動するのかというと、この調査に基づいて、フォーラムに参加する人が選ばれるということになります。したがって、これまで毎年やってきた学会員と市民の意識調査に加えて、フォーラムに参加する人を選ぶということを、2つ同時にやらなければならないというのが、今回頭を悩ますところになっていくだろうと思います。

では、2-1の議事1から話を進めていきたいと思います。少し読み上げます。

今年度のアンケートの実施方法について。従来型のアンケートとは別に、フォーラム参加を募るための別紙アンケートを作成し、別封筒を用意して、そちらに入れてもらう。別紙アンケートは、本アンケートの一部を選択して、作成する。分量はフォーラムの説明も含めてA4用紙4枚程度。これが、先日社会調査コアグループで考えたアイディアです。

なぜここに落ち着いたかということ、少しご説明いたします。調査上の倫理問題が全てであります。倫理を無視していいのであれば、効率だけ求めるのであれば、調査票に氏名、住所を書いてもらって、集計して、こういう意見を持っている人は誰かというのをまた調査票に戻って調べて、ああ、こういう意見を言っている人はこういう人かと。だから、あなたに頼みます、ということができのですが、今の時代は到底そのような調査は許されません。そうすると、本調査は無記名でやることになります。

けれども、この質問にこういう答えをした人は誰かということ特定しないと、フォーラムの参加者を指名することができません。そこで、このような形式しかないのではないかとこのところに落ち着きました。

後ほど、本調査でどういうことを聞くかということは改めてご検討いただきたいのですが、ざくつと言うと、フォーラムに参加してもらうために必要な項目は、本調査全部を使わなくてもいいだろうと。非常に簡単に申し上げますと、原子力に賛成なのか、反対なのか。あるいは、原子力に携わっている人に対して、信頼があるのか、ないのか。それから、性別、年齢。場合によっては職業、学歴。フォーラムに来る人を、こういう基準で選びたいと設定した、その基準だけを質問項目にした別紙アンケートを用意するということです。

別紙アンケートは、そうはいつでも記名のアンケートになりますので、フォーラムのことを説明した文章をつけて、「これは記名のアンケートです。フォーラムに参加していただける方だけお答えください。フォーラムに参加する意思のない方は、記入されなくて結構です」という形にしようと思っています。

さらに、それは封筒に密封していただき、調査会社も見れないという形にします。本調

査は調査会社に回収されていくのですが、別紙アンケートに関しては、直接木村研究室に発送するという形態を取れば、なんとか 500 人の中から 10 人くらいずつ残る人が出てくるのではないかと考えているところです。

まずはここまでで、何かご意見をいただければありがたいのですが。

—— 確認なのですが、別紙アンケートは、本アンケートの一部を選択ということは、同じ質問になるということですか。

(土田) そうです。というのは、全体でこういう分布をしていると。一方で、フォーラムに答えてくれる人は、偏りが出るかもしれません。そうすると、全体の分布を見て、分布上偏りのない人たちを選ぶために本調査を使うことになりますので、同じ質問を使わないと、それができない。

—— それは専門家のアンケートですか。

(土田) 専門家も市民も、両方です。後で見てもらいますけれども、専門家と市民の調査票は、ほとんどは一致しています。

—— 情報として、この前の討論型世論調査では、運営者にいろいろアドバイスをする立場として入っていたのですが、そのときには 3000 名に電話調査をして、約 1 割は会合に出てもいいという答えが返ってくるだろうという想定をしてやりました。そういう調査を今までやったときに、3000 名だとやはり 300 名くらいは出てもいいという声が戻ってくるのですね。そのくらいの感じはあるみたいです。

今の話だと、500 名ですから、50 名くらいは出てもいいかなという人が出てくるだろうと。そうすると、そこから 10 名に絞るときに、今度はどういうメガネをかけて絞るのかという辺りが、先ほどのアンケートのところなのです。

(土田) そこは後だしじゃんけんで、調査をやって、その結果を見てから考えてもいいと思うのですけれども。とにかくそこが、このプロジェクトの鍵になると思います。

—— そうすると、参加してもいいよと言ったのに断られる人も出てくるわけですね。何を理由に選んだのかということが、公平感を持って最後に結果が出るのが大事ななと思いました。

(土田) そうですね。

(木村<sup>浩</sup>) 今のご指摘、どういう基準で選ぶのかということは、調査票を発送するときにすでに書いておかないと駄目ですね。

(土田) そうなのですね。

雑談で、神崎さんとかとも話したのですけれども、フォーラムを東大で開催する、たとえば、喜んでくる人も多いのではないかと、そんな話もしていたのですね。

—— 確かに、10人よりも多いと思います。

—— 市民はもっと多いけど、専門家はそうではないかもしれない。

(土田) そうですね。東大でやるというと、行きたくないという人もいるかもしれません。

—— その方法で注意しておかなければいけないのは、原子力でいろいろな会合をやるときに、「定員になり次第閉め切ります」というものがありますよね。その定員というのは何かというと、裏を返すと、ややこしい人の断りの理由に使う場合があるのです。公平性を気をつけておかないと。

(土田) そうなのです。これは私のテリトリーではないのですけれども、参加者はこちらで選びます、ということが基本的なスタンスです。ただそれを、理由がついて、それこそ先ほどおっしゃったように公平にやらないと、何のために金をかけてやっているのか分からなくなりますので。そこがきちんとできるかどうかは、非常に重要だと思います。

—— もし、東大のフォーラムに参加したいという人が多いのだとすれば、バイアスがかかってしまう心配がないですか。

(土田) あります。バイアスをどこまで小さくできるかが勝負です。完全に0にはできないと思いますが。

—— 原子力が好き、と書かないと、選んでもらえないというバイアスが。嫌いと書いたら弾かれるだろうなって。

(土田) そういうのであれば、依頼状に「反対の意見などの人も募ります」とわざわざ書くとか。

まあ、参加したいと思えば、選ばれたいと思うでしょうから、選んでもらうためにはこ

ういうことを言ったほうがいいというようなことを、こちらから誘導して、こちらがほしいという人のことを書いておいて、こう答えてくださいねと、そういうテクニックもありますよね。

—— 専門家が参加する場合がありますけれども、特に私たちはメーカーなので、どういう背景で参加したらいいのかを明確に書いていただけると、安心して参加できると思います。躊躇してしまうところがあるかもしれないので、事前にそういう案内を付け加えるといいと思います。

(土田) そうですね。ありがとうございます。

—— フォーラム参加者のバイアスの問題ですが、原子力に対する左、右、中立というのは、本アンケートと照らし合わせればできるのですけれども、基本的にはこういうところに参加希望する人はノイジーな人ですから、サイレントな人が落ちますから、初めからそこでバイアスがかかるのです。

それから、何とか学会だとか、東大だとか、実施する主体によって、来る人のバイアスがかかりますから、もうそれは肚をくくっていいと思います。可能な限りやるということで、それ以上のことはできないものはできないので。

それから、質問なのですが、専門家と市民が 10 人 10 人というのは、アンケートを受けた人の中から、専門家と市民を 10 人ずつ、何らかの方法でチョイスして、20 人集める、そういうイメージですか。

(土田) はい。アンケートを 500 名、500 名で走らせるという感じです。

—— 先ほどの、「背景」というのは非常に大事だと思います。私はメーカーにいて、やはり設計する人と現場でものを作っている人は、意識が違うのです。

(土田) 学会員調査ということにしていますから、荒っぽく定義すると、ここでは学会員をムラ人だと定義しているのです。でも、私も学会員ですが、ムラ人に入れてもらえそうにないと思います。

—— その逆もあるのですよね。本当の専門家でありながら、学会に入っていない人もいます。私は学会に入ったのはついこのあいだですから。

(土田) ですので、先ほどご指摘がありましたけれども、調査をやってみて、自分はムラ人だと宣言する人がどんな人か、ということが浮かびあがってくれば、それはそれでい



いかなとも思います。

—— 私は、だからムラの定義は面白いなと思っていました。

今回の事故の直接的な原因は、津波の対策が 5.4 メートルで低かったということでしょう。あれを高くするかどうか経営判断をするのは、おそらく東京電力の経営会議のメンバーでしょう。この人たちは、絶対に原子力学会に入っていないと思うのですよ。ムラ人以外の人が、一番大事なことを決定している。だけど、あちこちで頭を下げてお詫びしているのは、原子力学会の人が中心でしょう。一番悪いことをした人は全然謝っていないで、ほとんど直接的な原因に関わっていない人が頭を下げて、しかも世の中から非難されている。これは面白い現象だなと思っています。ですから、ムラの話は、ぜひとも調べてみると面白いと思います。

私は、今回のプロジェクトで、専門家の中を分析対象にしているところが大変興味深いです。世の中では、ムラの住民と一般市民との間のコミュニケーションが足りているとか、足りていないという議論になるのですが、私は、そのムラと言われる専門家集団の中のコミュニケーションにも大きな問題があると思っています。そこにメスが入るのが大変面白いなと思っているので、今のご意見のように、そのメンバーをどのように選ぶかが、興味深いですね。

—— 参考までに教えますと、例えばメーカーで、原子炉容器を作ります。設計する人は、完全に自他ともに認める原子カムラの住人です。

ところがその図面を受けて、現場でものを作る人。これは、その機器の専門家集団として議論する場合は、設計と製作という立場で議論するのですね。ところが、そのものを作っている本人は、原子カムラの住人という意識が、非常に薄いのです。

なぜか。自分が作っているものは必ずしも原子力だけではないわけで、あらゆる種類のものを作っている。原子力はその **One of them** なのです。

だから、地震が来たときに最初に壊れるような配管、これを作る人は自分は原子カムラの住民だという意識は非常に薄いのです。もしくは、持っていない可能性がある。ところが、実際にものが壊れるかどうかという部分では、まさに（事故の原因を作る）張本人なのです。そういうギャップもある。

だから、専門家というのは、何をもって原子力の専門家というのか。

—— 電力会社でも、水力、火力、原子力があって、原子力の人たちは原子カムラでしょうけど、電力会社全体が、今や原子カムラと見られている。

ところが、やはり水力の人は全然そう思っていないし、火力の人もそう思っていない。会社の中でも、それ以外の人たちは全然違うのです。電力の中の原子力はまさに原子カムラでしょうけど、でも、一般の人から見たら、東京電力はもう原子カムラだと見る人もい

るから、その辺の定義というのは、すごく難しいと思うのです。

—— どういう背景で専門家と称するのかというのも、ある程度考えたほうが良いと思います。安全設計、製作設計、ものを作る現場。それぞれ意見が違うと思うのですね。

—— 私は一般市民のつもりなのですが、その立場から見ると、今おっしゃった作っている人は、原子カムラの人ではないような認識なのではと思いますが。

—— マスメディア（テレビ、新聞、週刊誌など）のあるシンポジウムにゲストで招かれたことがあります。マスメディアではないメンバーは私 1 人で、あとはマスメディアの人たちだけで議論をして。外からどう見えるのかを言ってくれということで、私はお話ししたのですが。「マスメディアは原子カムラの一員だったのか」。そういうタイトルのシンポジウムでした。ですから、原子カムラにも、いろいろな原子カムラの考え方があると思います。

要するに、マスメディアの中では、週刊誌が新聞、テレビを叩いているわけです。本当のことを書いているのは週刊誌だけだと、週刊誌の人たちは言っているわけです。大新聞は原子カムラの住人と同じだ、という言い方をマスメディアの世界では言っていて。そこで、そういうタイトルのシンポジウムで、本当に自分たちがそうだったのかディスカッションしていました。聞いて面白かったのですけど。

そういう意味で、いろいろあるのですよ、原子カムラというのは。

—— ムラの一番主要な構成要素は、産官学なのです。その産の中で、さらにメーカーの中の設計だ、製造だという話はあるけれども、それは基本的に、差異はあるのですけれども、基本的には小異の話であって、それほど話ではないし。電力会社の中にも水力、火力、原子力があるという話も、基本的には産官学の大雑把な枠の中に入るか、入らないかという話です。

今のお話はもう少し広い範囲の中の話です。産官学の他に、例えば御用っばいようなメディアだとか、あるいは原子力推進に大きく貢献した自治体の人だとか、あるいは調整団体とか、こういう人たちまでムラに含めるかどうか、というのが一番広い範囲のムラの定義になると思うのです。

どこまで入るか入らないかのうちの細かい話はもう抜きにして、あるいは、このムラの話自体、今そんなにつめる必要があるでしょうか。

—— 普通の人から見ると、原子カムラというのは、中がどうなっているかまったく分からず、ブラックボックスのようなもので。実はブラックボックスを開けてみたら、中にいろいろな方がいらして、その方たちのコミュニケーション自体がとても大事なことなのだ

ということが見えてくるとか。そうすると、これから原子力を安全に運行していくためには、業界の方が、意識改革が必要とか盛んに言っていますけれども、この話は、もしかしたらそういうことにもつながっていくのではないかと。効果、目指すところが大きいなど思いながら伺っておりました。

—— 市民と専門家（原子カムラ）も 10 名ずつ選ぶのですよね。おそらく、市民 10 名を選ぶのも大変だし、原子カムラ 10 名を選ぶのも大変だと思うのです。

だから、フォーラムがどういうものかということを確認したほうがいいのではないかなと思いました。1 割も出たい人が出るのだとしたら、選び方を考えておかなければいけないなど。

（土田） おっしゃる通り、初めにきちんと決めなければならないのですが、決めたとしても、その通りにいくかどうかは分かりません。調査やってみてから調整するということになるだろうと思います。

—— それでいいと思うのですよ。ただ、そういうことを最初から考えておかないといけないのではないかと。

—— 選び方ですけど、ポイントとして、1 つ目は公平性だと思うのです。2 つ目が透明性。3 つ目は恣意性の排除と思うのです。この恣意性の排除のときに、今のご指摘も入るのですが、このフォーラムをうまくやろうとすること自体が、すでに恣意性が入るのですよ。ですから、それをやっちはいけないと思うのです。

左、右、中立とか、そういう分布を分けるのは、そこまでの恣意は OK だと思うのですが、このフォーラムをうまく仕立てるために、こういうことをうまく言ってくれそうな人を選ぶというのは、その時点で公平性が失われると思います。失敗してもいいと思います。

—— 私の先ほどの発言は、フォーラムという意味よりかは、むしろ、公開の場でやるのかとか、そういうことを明確にしておかないといけないという意味です。

（木村<sub>浩</sub>） 基本的にフォーラムは、議事録は出すのです。

—— ホームページに出すのですよね。

（木村<sub>浩</sub>） はい。議事録は全て出すことにします。ただ、誰が何を言ったかは分からないようにする。だから、組織を背負っているということは分からないように出す。そこはこ

ちらの研究者レベルで全部消して、問題ないものを出すと。

メディアはその場には入れられないですね。だからメディアは入れないですが、何も情報がないという状況になると、かえって何をやっているか危なくて見ていられないので、報告書は出します。ただ、出すときに、フォーラムの中身に変に影響が出ないようにする、というところは考えています。

—— そういうことは書いたほうがいいのかもしいですね。

(木村<sub>浩</sub>) むしろ、書かないと駄目です。

(土田) 議論は尽きないですね。一言だけ。恣意性をつけないようにするには、条件をつけてある程度絞って、候補が何人かになったら、サイコロを振るしかないなど。

—— 乱数か抽選かですね。

(土田) そういう形でやる、というくらいに区切ったほうが良いと思います。

—— 賛成です。

—— 討論型世論調査に非常に慣れていらっしゃるご専門の先生に伺ったときに、母集団を大きくしておくと、どのように選んでも、元の母集団と同じような形になるという話を聞いたことがあります。

(土田) そうなのです。そうすると、5000人とりたいなということになって。そこは痛し痒しです。

(木村<sub>浩</sub>) あと、その討論型世論調査は、こちらでいうところのフォーラムにあたる会合が100~200人規模ですね。そのくらいの数ならある程度統計的な分布になるのですが、こちらは10人ですので、そうは絶対にならないので。

(土田) はい。議論は尽きませんが、調査の内容に移りたいと思います。

(木村<sub>浩</sub>) その前に、休憩を入れませんか。ちょうど1時間半経ちましたので、5分ほど休憩を入れたいと思います。

(休憩)

(土田) では、時間も来ましたので、再開したいと思います。

2-1の議事2、従来型アンケートの項目についてです。資料の2-2について、ご説明を申し上げます。

アンケートの2ページ目は、関心のあるものは何かという形で、いくつでも関心があるものに丸をつけてもらおうと、何%の人が丸をつけたかが出てくるわけで、相対的に原子力や放射性廃棄物が、他のものと比べてどのくらい関心を持たれているのか、が取れます。調査技法的にいうと導入部分で、この辺で調査に乗ってきてもらうか、というような意味も含めてやっています。Q2で不安に感じるものという形で、同じ項目に丸をつけてもらうことになっています。

3ページ目ですが、これは昨年度設けた質問で、福島第一原発の事故を受けて、放射線や放射能に関していろいろ聞いております。この質問群が作られた背景は、福島第一原発の事故を受けて、昨年の世論としてどうなのかということを探ろうとしたものです。時系列に、今年どう変わっているかを見る意味もありますし、そもそも原子力に関して、やはり事故が起こるということを前提にすれば、こういうことを聞いておくのは当たり前のことなので、継続して聞いてみようと考えています。

4ページ目の内容は、あまりにも事故に関連することが続きましたので、Q5～7は今年度の調査では省きます。Q8、9は、事故が自分や知り合いに影響を及ぼしているかどうか、あるいは、社会全体に影響を及ぼしているかどうかで、聞いてもいいかな、省いてもいいかな、ぐらいのところで、今検討しています。

5ページ目以降は、毎年聞いているコアの質問になります。ここは、よほど強い意見でもない限りは、残します。継続項目です。ただ、Q14は昨年度入れた質問で、あのような事故がまた起こると思うか、という質問、これをどうするかは今検討中です。

6ページのQ15も継続項目です。これも残そうと思いますが、ク)に関してだけは、あまりにも場違いではないか、あるいは、この質問文を入れることによって、回答者から反発を呼ぶのではないかとかいうことも考えられたので、どうしようかと検討しているところ です。

7ページ目も継続項目です。かなり具体的な施策についての意見を聞くという形になります。原発が20年後どのくらいになっていると思うか、などの質問になります。

8ページ目、Q20、21は信頼に関して聞いています。意味がありそうだからということで、今年も聞いてみましょうかということで、入れています。手探り的な調査項目になっているのですが、信頼してもらうためにはどういうことが大事なのかということを一応聞いておこうということになっています。

9ページ目は、原子力学会に期待することという形で昨年度聞いていますので、今年度も聞いています。この辺りを少し調整すると、原子カムラというものにも持っていくこともできるという形で、たたき台になっています。

—— Q22 が赤くなった理由は、何かあるのですか。

(土田) はい、あります。質問文が、「期待していますか、それとも期待していませんか」というワーディング（言葉遣い）なのですが、ここはもう少し考えたほうがいいのではないかとということで、赤にしています。言葉を変えてしまうと昨年度との比較ができなくなってしまいますのですが、場合によっては、当為のような「すべし」という聞き方をしてもいいですし、あるいは実績として「やっているといますか」という聞き方にしてもいいと思います。どの聞き方をするのが一番生産的か、ということで検討しようと思っています。

10 ページ目は、性、年齢等を聞いています。その前に、可能であれば、福島事故に関する意見についての項目を入れることも考えられると。

では続けて学会員の調査票（2-3）を見ていただけますか。見ていただければ分かりますが、9 ページまでは市民のものと一緒にです。10 ページ目が、学会員向けの調査では付け加わるということになります。

そして、先ほど、市民の調査票の 10 ページ目で、「福島事故に関する意見についての項目を入れる」と書いてありましたが、それは学会員の調査票の 10 ページの内容を入れるという意味です。

昨年度は学会員にだけ聞いたのですけれども、福島事故をどう評価するかということですが。一般市民の方もご自分の意見というものを持っている方がだいぶ増えてきているだろうと思われまので、聞いて無理がないという判断で、今年度は一般の市民の方にも聞いてみようと思います。あれは人災なのか自然災害なのかとか、そういったことから始めて、福島事故をどう評価するかという項目を聞いてみようと考えています。

では、ここまででご意見をいただきたいと思います。

—— 細かいワーディングはほとんど問題ないと思いますが、大きなところで 1 点だけ。Q8 と Q9、これはキャリーオーバーではないですか。キャリーオーバーというのは、前の質問項目が後ろの質問項目の回答に影響を与える可能性があるという意味なのですが。Q8 で、福島事故は、今、影響を及ぼしていますかと聞いた上で、Q10 で、原子力発電に関心がありますかとか、Q11 で原子力発電を利用していきべきだと考えますかという質問は、原子力発電について普段ならあまり関心を持っていない人の気持ちを攪拌させて、表面化させた上で Q10 以降が来ますので、明らかにこれはキャリーオーバーです。

(土田) おっしゃるとおりです。

—— よって、Q8、9 をもし活かすのであれば、後ろのほうですね。

(土田) ありがとうございます。その通りです。

—— そうかもしれないけど、昨年度はこの順番でやってしまいましたね。

(土田) 昨年度がまずかったのです。

—— まずくはないと思いますね、私は。

—— 昨年度は事故の直後だから、それを聞かずに何を聞くのかという理屈があるので。だけど、今年度は、もし本当に原子力発電について中立的に聞きたいのであれば、Q8は明らかに違反です。

(土田) おそらく昨年度はキャリアオーバーにならないくらいに、皆関心を持っていたのですよ。だからこれでいいということになったのです。

—— そうしたら、逆に言うと、1年経ったときのその影響を見なければいけないわけですよ。

(土田) いや、でも、それはいいでしょう。

(木村<sub>浩</sub>) そうしたら、順番は、2年前に戻したらいいのではないですか。

(土田) そうですね。それがいいと思います。

—— いや、Q8、9は2年前には入っていませんから。Q8、9をどこに置くか。

(木村<sub>浩</sub>) いや、だから最後ですよ。

—— 少なくとも中立的な意見を聞いているQ10～13の後ならばいいと思います。

(土田) Q5、6、7は消しますし、去年度と比較すること自体が無茶ですから。

—— それはそうですよね。Q8、9は、かえって除きますか。

(土田) 除くという手もあります。意味があるのかということはありません。

—— Q8 と Q9 なのですが、この質問で何を聞きたいのかがよく分からないのですよね。「影響を及ぼす」というのは、福島にいる方だったら、健康状態の影響を心配しているのかもしれないし。あるいは、除染とか、そういうことの影響かもしれないし。あまりにもいろいろな要素がありすぎて。

(土田) そうですね、ぼやっとしすぎていますね。

—— この数字が何を意味するのを期待しているのかがよく分からないのです。

—— 影響ということについては、確におっしゃるとおりです。ここでは、思わない方がどのくらいいるかを見ることに意味があったと思うのです。思わない人がどのくらいいるかということが一番のポイントになります。

—— 2 番に丸をつける人ということですか。

—— そうです。確にご指摘の通り、影響にもいろいろありますよね。その影響というのは区別しないで、まったく自分に影響がないと回答する人を主題にした質問です。

(土田) 特に昨年度の場合はそれが意味があるだろうと。あれだけのことがあっても、自分には関係ない話だと言ってくる人が、首都圏にどれくらいいるか。

—— さすがに、あまりいなかったのですけどね。

—— だけど、また 1 年経ったら、影響を及ぼさないとと思っている人が、相当増えていると私は認識しているのです。そこを調べる必要は非常に大きいと思うのです。だんだん認識が薄れてきていて、なんと申しますか、風化が起こっているのですよ。

(土田) おっしゃる通りです。ただ、この質問だと、もう道義的にというか、こう聞かれたら及ぼしていると答えざるをえないだろうというような聞き方をしているのです。ですから、それを聞こうとすれば、聞き方を少し考えたほうがいいですね。

—— かなり誘導しているような感じがしますね。

—— それか、去年より今年はどう変わったかと聞けば、変化は分かるかもしれませんね。こう聞かれたら、ほとんど 1 (及ぼすと思う) に丸をつけちゃいますよね。



—— 1につけちゃう。

—— とにかく Q8、9は、聞き方を変えて、後半に持っていくことにしますか。

(土田) 聞くとしても、聞き方を変えて、後ろに回しましょう。ありがとうございます。  
時間は限られているので、次に進みます。

議事 3 に移ります。どんな項目を別紙アンケートにするか。今年度の場合は、先ほど申し上げた通り、もうひとつのミッションがあります。フォーラムで参加者を選ぶために何を聞くかということのを新たに考えました。議事 3 で検討した項目が、本調査のほうにも入るということも含めて、検討させてください。

本調査票のほうで、20年後に原子力がどのくらいになると思うか、という予想があったわけですが(Q16~19)、これに当為の「すべき」というものを追加するということが、少なくともフォーラムに参加する人を選ぶ場合にはあってもいいのではないかという議論をしています。

次に、違う話になりますが、謝金も用意すると。それはまあ、飛ばしまして。

具体的なアンケート項目ですけれども、原発反対デモに関して、知っているかということ、共感するかということ、あなたも参加してみたいかということ、あるいはあのデモがどれくらい効果があるか、意味があると思うかというようなことを聞いてもいいのではないか、という案です。これらはあくまでも案です。

それから、これは非常に心理学的になるのですが、いろいろな理屈をつけても、結局好きか嫌いかで物事は全部決まるというようなことがありますので、ざくっと原子力が好きか嫌いかを聞いてみる。

次に価値観ですが、物質的に物がたくさんあることをどれくらいありがたいと思うか。あるいは、1人1人の自由よりは社会全体のことを考えるべきだというような、そういった価値観も聞いておくといいのではないかという意見も出ました。

それから、豊かさ。先ほどと少し似ているのですけれども、豊かさを精神的豊かさで定義するのか、物質的豊かさで定義するのか。

それから、今指向なのか、将来指向なのかということですね。あるいは、お年寄りだと昔指向というものもありますけれども、その辺を聞いてみようか。

そして、全体主義とかぶるのですが、社会貢献に関して、社会の利益を重視するか、自分の利益を重視するか。これらは、保守主義、革新主義といつていることを言葉を変えていつているのですが、そういうことを聞いてみる。

それから、他者にどのくらい利益を与えたいと思うか、というような博愛主義のスケールも聞いておいていいのではないか、ということです。

それから、ここにメモ書きしていないのですが、先ほど議論した「原子カムラ」に対するイメージというのが、大きい項目としてここに加わっていきます。

アイデアを出しただけなので、まとまりがないのですが、この中からどれがいらなくて、どれがいるかというような形でやっていこうと思います。これは参加者を選ぶためのフィルターですので、多くすれば多くするほど身動きが取れなくなって選べなくなってしまいます。数は多くても4つ、できれば3つくらいで済ませたいと思っています。

—— 私が聞くのもおかしいのですが、ムラのイメージは別紙アンケートに入れると言っていましたよね。私の先ほどのイメージでは、ムラのイメージは本調査に入るような気がしたのですが。

(土田) 両方に入れます。基本的には、別紙アンケートに入れるものは本調査にも入れます。

—— 具体的なアンケート項目の中の3番目、4番目、5番目、それから最後の8番目は、おそらく同じかなど。大きく分けると、現実指向、秩序指向型の人と、変革指向、未来指向の2大ジャンルに分けられると思います。

(土田) そうです。社会貢献も、おそらくそれとかなりよく連動すると思いますので、それで1つの質問にできるかと思います。

—— NHKとか、いろいろこういうことを聞いている質問がありますので、同じように絡めると、その人が全体的にどこにいるかということが分かりますし、実はこういう項目と、原子力の好き嫌いというのは非常に相関がありますので。

(土田) サイレントなのかノイジーなのか。その辺りを聞けるかなと思って、デモに関する質問を入れたのですが、どうでしょうか。

—— デモですからね。原子力推進の人だと、これは違うニュアンスに取られますよね。反対派の人だったら、ノイジーかサイレントかこれで分かるのだけど。推進派の人だったら、どちらも嫌ですね。

(土田) そうですね。どれくらい関心がありますか、という形でざくっと聞いたほうが、むしろ無難でしょうか。

—— 関心は、好意も悪意もありますよね。すごく嫌だと思っても、それは「関心がある」ですよ。

(土田) そうです。ですから、2本立てで聞きます。

好きか嫌いかと書いていますが、これはおとなしく聞けば、賛成か反対か、でいいわけです。賛成か反対の軸と、どれくらい関心が強いのかという軸、この2軸で分けるということが、一番の基本だろうとは思いますが。

—— 反対派の人は反対の答えしかしないでしょう。それを分ける意味は何ですか。

(土田) 反対だけれども、あまり関心がない人もいるということです。

確かにそうなのですよ、この2つは結構連動していて、反対の人は関心が高く、賛成の人はあまり関心がないというのが、少なくとも福島事故の前までは世論的にはそういう構造をとっていたのです。でも、どうかな。

それから、特に専門家の場合にはまた違うだろうということで、関心の深さというのは軸としているかなとは思いますが。

—— それだったら、どのくらい関心がありますかという、関心の度合いで聞いたほうがいいのではないですか。

—— 調査では、それはとても難しいことなのですよ。

—— かなり主観的になってしまいませんか。いい質問ではあると思うのですが。

(土田) バックグラウンドが似ている人であれば、どんな行動をしますか、という聞き方もあるのですが。しかし、バックグラウンドが多様ですので、行動レベルで聞けないのですよね。

—— Q16～19を見て、微妙な時期に微妙なことをお聞きになるなと思ったのですが。今の民主党政権は、2030年に15%を目指して、2030年代に0を可能とするようにあらゆる政策を投入するということを、一応は宣言をして。そこに真意を問う形で選挙が12月16日にあつて。そういう時期に、20年後に何%になっていると思いますかとか、なぜこういう時期にこういうことを聞かれるのか、とても不思議なのですが。

(土田) ご説明します。福島事故の前から、おそらく20年ぐらい前に、こういう質問を思いついた人がいて、それ以降皆が真似て、原子力に関しては、こういう形式の質問が毎年のようにいろいろなところで行なわれてきたという経緯があるのです。

昨年度も、福島事故の後にこれを聞くのか、という議論は確かあったと思うのですが、まあ継続調査だから、どう変わったか聞こうという形で聞いてみた。今年も、何も考え

ずに、毎年聞いてきたのだから聞いてみるかという形で置いているのです。

—— 分かりました。では、そういうものに関係なく、基本的にどう思っているかを、とにかく同じように聞いていく、淡々と聞いていくということですね。

(土田) はい。おっしゃるように、16日に選挙をやって結果が出ますよね。この調査は1月実施ですから、自民党が政権を取っていたら、またそれで変わるでしょうし。何ともいえないところがあります。

(木村<sup>浩</sup>) むしろ、そういうイベントがあつて、どう変わったのかが見れるので、それはとても貴重な資料になっていきます。

—— 1点付け加えますと、「20年後に～」という質問は、「としますか？」という「予想」を聞いているのです。予想というのは、人によってはちゃんと予想しますし、人によっては「期待」が入ってくる。本当は、予想と期待の両方を聞きたかったのです。予想と期待が同じとか、違うとか、面白いのですが、さすがにそこまでは今回はやらないということ。

ただし、別紙アンケートにはそれを入れてみようかというアイデアはあるのですね。  
(20年後の「予想」と「すべき」を別途追加する)

(土田) あります。「すべき」でもいいし、「あなたはどうなってほしいと思いますか」という聞き方でもいいですね。

—— 今年の1月に調査したときに(昨年度調査)、原発が0になると思っている人が結構少なかったのです。だから、「すべき」と「予想」がかなり違うのかなという感じはあります。討論型世論調査でも、「すべき」という質問は結構多いですね。

—— あと、意見を言いたい人とサイレントマジョリティーとか、そういうのを政府がどう判断するかとか、それは政府が判断していることなので、社会一般というよりは政治の世界の判断です。

(土田) これは本当にたたき台のアイデアだけですので、少し教えていただきたいところがあります。実際にこれでフォーラムを走らせるわけですね。走らせるという立場になってみると、こういう基準で参加者を選んでほしい、というものはありませんでしょうか。

—— デモを知っている、知らないというのは、要するに反対派の人たちのグレーディングとかグラデーションを聞いているだけなので、一般的に関心があるかないかを聞いたほうがいいと思うのですが、フォーラムに出てくる人は関心がある人ですよ。だから聞く必要がないのではないのでしょうか。

それから、先ほど言った現実指向とか変革指向とかの話、これは基本的にはあとは全部同じですよ。つまり、大雑把に言えば、反対派の人たちは変革指向や未来指向が強くて、原発容認の人は現実指向や秩序指向が強いというのはだいたい見えていますから、いっそ、「原子力好き、嫌い」だけ聞いたら駄目ですか。そうすると、はっきりするでしょう。あ、真ん中も入れてですよ。

—— 答えにくいよね。

(土田) でも、1990年に、原子力産業会議の調査に、私はまだ若かったのですが入れてもらったのです。原子力の説明をするのに、一番説明力が強かったのがこの質問なのです。すべてこれで説明がついてしまう。好きか嫌いかで全部決めているのだなとよく分かったのですけど。

—— 嫌いだけど、あっても仕方がない、という考えはどちらに入るのですか。

(土田) それは、また別軸です。

—— 本当は嫌なのだけど、全体社会を見ると、あっても仕方がないかなと。でも、好きか嫌いと言われてたら、嫌いという人。

—— 好き・嫌い と、賛成・反対の 2 軸で分ければいいのですよ。

(土田) あとは、仕方がないと思うか、絶対に阻止すると思うか、という軸もありますね。

—— その仕方がないという考え方が、事故が起こってから 1 年半から 2 年になろうとしている時期で、だんだん皆さんが自覚してきて、認識が変わってきていると、いろいろ話をしていて私は実感するのです。それが見える形に、何か工夫されるのがいいのではないかと思います。

—— Q10 から Q13 を分析すると、仕方がない軸と賛否軸というのが実は出てくるのです。「仕方がない」が減ってはいない気がします。

—— そうですね。それはいつからいつの話ですか。

—— 福島事故前後です。

—— 前後はそうですけれども、1年以上経って、どうなのでしょう。

—— 1年以上経ったところでは調査していないから、分かりません。

—— そこが私は非常に期待しているというか。

—— 答えとしては、この質問を出すと、仕方がない軸が出てきます。

—— それは非常に貴重だと思います。仕方がないというのは、非常に消極的、排他的に聞こえますけれども、本質的にそういうものであると認識し始めているという事実が、私はあると思うのです。

(土田) 「仕方がない」を、積極的にワーディングして入れますか。私もいいと思います。

—— そうですね。Q11、利用していくべきだと考えますかという質問がありますね。「どちらかといえば利用していく」が中間的な賛成なのですが、だいたいどの調査でもここが多くなるのですが、この中に実は、嫌いな人が結構いるのです。その嫌いな人は、仕方がないと思っている傾向が強いです。そういうのははっきり出てきます。

今回は、「どちらかといえば利用していくべき」で、実は嫌いだという人が、実は減ってきたということはありません。

(土田) 「どちらかと言えば利用すべき」で、「嫌い」と答える人は必ず出てきますので、これは間違いなく仕方がないだと思います。

—— それと、文字で意見を書いていただく欄もあるのですが、明らかに傾向が出てきます。弱くは賛成するけれども、実は嫌い、という方の考え方には、やはり仕方がないという気持ちがあるというのが、明確に出てきます。

—— すみません、話題が変わるのですが、どういう人を選んでほしいかということを書いていいですか。リタイアされた年齢の人が多すぎないほうがいいなと思うのです。働き

盛りの男性が入るようにしてもらいたいと思うのです。

(土田) それは、実年齢のほうがいいですか。それとも、5歳刻み、10歳刻みでいいですか。答えるほうからすれば、やはり何歳刻みで聞かれたほうが答えやすいのですが、本当にきちんとやろうとすると、実年齢を聞かないといけない。

—— 50代とか40代とか。

(土田) 10歳刻みくらいですね。分かりました。

—— 働き盛りの男性というのは、やはりフォーラムに出てこられないという観点で、重要だと思うのですか。

—— 出てこないのと、声が全然届かない。

—— そういう人たちが本当に何を考えているかということは、報道されてもいないし。

—— 40代ぐらいの男が、一番意見を言わないということですね。

—— フォーラムのメンバー構成なのですが、社会の実際の年齢構成で人数を割り振っていくのですか。それとも、20代、30代、40代、50代、60代、男性女性で分けてやるのですか。

(土田) できれば、人口分布に則ったような形でフォーラムが作られればと思うのですが、技術的にそれが可能かどうかは、走ってみないと分からないです。

—— フォーラムは5回やりますよね。5回全部出たかいないと駄目なのですよ。

—— そうですね。あくまで希望です。

—— 年齢のことが出たので、普通に言うと、後は男女ですね。市民は男女半々にできると思うのですが、専門家の方って、女性の方がたくさんいらっしゃるのでしょうか。この事故の後、女性の専門家のコメントを聞いたことがないので。

(木村<sub>浩</sub>) 確か、学会員の女性比率は1、2%ですよね。

—— え、そんなに。

—— そうすると、ムラを作っているところに女性はいないから、たくさん女性を入れなくてもいいということでしょうか。

—— 女性は1人ぐらいは入れないと。

—— そこは、比率に回帰するか、あるいは作為的に女性を多くするかは、決めていただいたら、どちらかにすればいいですね。

(土田) ただ、専門家の女性を5人集めて、5回とも出てきてもらうというのは、現実問題としては、不可能とっていいくらい難しいですね。

—— 女性が1%としたら、10人の1%だから0人ですね。

—— 原子力学会の男女参画のセミナーなどでは、女性は、見たところ20人くらいいらっしやるように見受けられますけれども、駄目なのですか。

(木村<sup>浩</sup>) 専門家への調査はランダムサンプリングで郵送でやるので、そもそもその中に女性は何名入るのかという問題があります。

—— 専門的技術は、女性と男性で差があるのでしょうか。

例えば生活する場においては、女性と男性で相当生活パターンが違うでしょう。感性も違うでしょう。だけど、専門家というのは、専門知識を持っている人、専門技術を持っている人のことです。そこに男性と女性の差が、意味があるのか。

—— それはあるのではないですか。

—— 私もあると思います。

—— ありますよ。男が知らないだけで。ありますよ。

アメリカでも、男女とか黒人の差別を無くすように、強制的に割り当てしますよね。逆差別だという意見が出るくらいにまでしてまでも、試行して、少ない人の意見を取り入れようとしていますよね。この調査においても、私は個人的には、そういったことを考えたほうがいいのかと思うのです。



—— ただ、現実問題として、

(土田) そうなのですよ、結論はそこに落ちるのですよ。まあ、木村先生が最終的に決めればいいことなのですけれども (笑)、現実問題として、原子カムラの構成員と自他共に認めるような女性というのはかなり少ない。いないとは言いませんが、かなり少ない。そうすると、その人をむりやり連れてくると、むしろゆがんだバイアスがかかっていることになってしまうので、現実には比率として少ないのだから、出てこないことになる。

ただし、ランダムに選んで、たまたま女性が入ってきたら、それを排除する理由はないですね。

—— それを排除する理屈はないですね。

—— くじ引きにするか、専門家はできるだけ平均像にするかとか、決めてしましましょうよ。

(土田) 無理をしなければ、自然分布に則するという形で大原則を作れば、それで技術的には終わりだと思います。

—— 専門家集団はそんなに問題ないと思うのですが、一般市民は、母集団はアンケート回答者ですか。それとも、日本人口を母集団とするのですか。

(土田) 日本人口にしたいのですけれども、この調査は輿論科学協会が、仕上がり 500 という形でやっていますので、おそらく割り当て表を入れて強制的に、つまりマッチングの考え方でやると思うのです。そのマッチングは、性・年齢別しかないと思います。そうすると、輿論科学協会の調査自体が、性・年齢別で無理やり自然分布にさせますので、結論としてはそういう形になります。

—— なるほど。分かりました。

—— それがいい悪いは別なのですけどね。

(土田) ということで、時間になりました。皆様からいただいたご意見を受け取りまして、もう一度コアグループで検討させていただいて、最終案を提案させていただきたいと思えます。

### 3. フォーラム検討グループ進捗報告

(木村<sup>浩</sup>) それでは、フォーラム検討グループの進捗報告とその議論に移ります。

(神崎) フォーラムの設計と、フォーラムの参加者の決定をするために、PONPO と元気ネットさんを中心に検討会議を開いています。本日の会議に間に合うように、14日に第1回のフォーラム検討会議を開きました。

いろいろな議論が拡散して出たのと、集約されたところとあったのですが、議論については、竹中さんに資料を説明していただいた後、行ないたいと思います。

(竹中) ということで、「コミュニケーション・フィールドの調査」というパワーポイント資料(3-2)をご覧くださいと思います。先日の会議から多少の修正も加えておりますので、先日の会議に参加された方も、新鮮な気持ちでよろしくをお願いします。

(スライド1) 最初に、従来行なわれてきたコミュニケーション・フィールドとはどういうものであるのかという話をします。2つ目に、参加型手法をいざやるとなった段階で、どういう設計がされているのかという話をします。3つ目に、では従来の手法と本プロジェクトで行なおうとしているコミュニケーション・フィールドは何が違うのか、どこを議論すべきかという点を話させていただきたいと思います。

(スライド2) では、1つ目のコミュニケーション・フィールドとはというお話です。コミュニケーション・フィールドという言葉は、明確な定義はなく、簡単に訳すとコミュニケーションの場ということになります。

では、コミュニケーションとはどういうことなのか。コミュニケーションだけだと少し定義が広いので、「専門家と市民の間で行なわれるコミュニケーション」と絞りました。

そうしたときに、過去から専門的な議論には市民が参加できなかったという背景があります。そのため、コミュニケーションという言葉は、対話・会話という意味だけではなく、もう少し広い意味で使われています。イメージとしては、大雑把に言ってしまうと、「相手に何らかの情報を伝達する場」になります。信頼であるとか、信用というニュアンスは、必ずしも入っておりません。

(スライド3) では、今まで市民と専門家は、コミュニケーション・フィールドにおいて、どういった関係性を持ってきたのかという図が、この図になります。

基本的には3つで、情報提供、意見聴取、情報提供と意見聴取を足したものの、になります。専門家から市民に何かを伝えるのか、市民から専門家に何かを伝えるのか、もしくは相互に関係があるのかというところで、それぞれ簡単な事例を紹介しております。

今回は、この情報提供と意見聴取を足した、対話プロセスがある、参加型手法というところに焦点を当てて、もう少し見ていきたいと思います。

(スライド 4) では、従来型の参加型手法がどのように分類されてきたかということを示したのがこの表になります。5段階に分類されておりまして、分類の軸はパブリック・インパクトのレベル、つまり世間に対してどの程度影響度があるのかというレベルで分類されています。

一番影響が低いのが、「情報提供」。情報提供をし続けるということです。2つ目が「意見聴取」。専門家が行なう分析・意思決定などに市民が意見を言う。3つ目が「参加」です。専門家が市民と協働する。次が「協働」。意思決定に向けて専門家と市民が共同する。そして「権限付与」。市民の決定を履行する。

この参加、協働、権限付与というところが非常に差別化が難しいという点があるのですが、基本的には、どの程度の権利が与えられているかというニュアンスがあるかと思っています。

(スライド 19) ここについては、先日も非常に分かりにくいということで、この分類はどこから来たのかという話になりました。出典をスライド 19 に示しました。

2000年に、International Association for Public Participation という、NPO のほうがこの分類を出しています。これを参考にされている日本の文献が多いということで、今回こちらから引用いたしました。

ただし、この英語を見ても、実際なかなか違いというのは見にくいという点があります。この表は、時間があるときに眺めていただければと思います。

(スライド 4) 戻りまして、この分類はどういう基準で作られたかといいますと、基本的には従来の参加型手法は、専門的な議題に対して、どのようにして市民参加を可能にするかという目的があります。なので、市民参加の度合いを基準に分類してきたと。

ただ、この中で行なわれている各手法の内容や目的が分からないということで、今回は次のスライドにある、少し違った軸で分類をさせていただきました。

(スライド 5) 大きく分けて 6 つあります。先ほど「情報提供」と分類されていた中でも、大きく分けて 2 つの情報提供があるだろうと。1つ目が「興味を持ってもらう」です。こちらはサイエンス・カフェという例があるのですが、サイエンス・カフェというのは、専門家の方がカフェ形式で市民の方と楽しくおしゃべりをする。科学的議題に対して、楽しくおしゃべりをするということが目的です。なので、興味を持ってもらうという手法になるかと思っています。

それに対して、「欲しい情報を届ける」。これは市民ジャーナリズムという例があります。

市民の代表の方が新聞記者のような役割をして、専門家にインタビューなどをして、市民の代表の方が新聞の記事を書くと。そして、それを市民に届けるということで、欲しい情報を届ける、先ほどとは少し違った形の情報提供になると思います。

次が「意見聴取」です。こちらも2つに分かれております。1つ目が、「自主的な意見表明を促す」。これは、公聴会などがあります。意見を言いたそうな方に言っていただく機会を設けるということが目的になっております。

一方、「出てこない意見を聞く」というところで、フォーカス・グループという手法を挙げています。フォーカス・グループというのは、多様な利害関係者をしっかり分けた後で、それぞれの利害関係者から意見を聞くということで、多様な意見をしっかり取ってこようという形の方法となっております。

次に、「参加・協働・権限委譲」です。こちらは、今回2つに分けさせていただきました。「認識を共有する」というのが1つ目です。コンセンサス会議という例が挙げられています。コンセンサス会議では、どこが問題なのかというのを、共有できるところまでは共有して、共有できないところは対立点として挙げるということで、どこまでが共有できるのか確認するというのを目的とする会議となっております。

一方で、「共同して創出する」。こちらはシナリオ・ワークショップという例があります。共同して創出するというのは、問題などを共有した後に、では、行動計画を作りましょう、町づくり計画を作りましょう、といった形で、共有した後の次のステップが入るという点で、違った分類とさせていただいています。

下に書いてありますように、分類は、参加者に求める目標を基準にしています。また、参加・共同・権限委譲には一定のコンセンサスが求められているということがポイントになるかと思えます。

(スライド6) では2つ目の話題、参加型手法の設計に移ります。

この2章で、「フォーラム」という言葉を私が間違って使っています。基本的にコミュニケーション・フィールドという意味で、フォーラムという言葉で使っておりますので、申しわけないのですが、ご理解ください。

ここでは、コミュニケーション・フィールドの設計がどのような段取りで、何に注意して行なわれてきたのかということを紹介させていただきたいと思えます。

若松征男さんの本を題材にして、この本の中で紹介をされている3つの事例を簡単に紹介させていただきたいと思えます。

(スライド7) 3つの事例を紹介する前に、どのような課題が共通して設計段階にあるのかということ、まず簡単に触れたいと思えます。

まず、「観察者の目的設定」があります。なぜそのコミュニケーション・フィールドが開かれるのか、ということを決めます。

その後、「コミュニケーション・フィールドの目的設計」です。参加者はコミュニケーション・フィールドで何をするのか。参加者の動機付けはどうするのかということを決めます。

その後、テーマに関する専門知識、視点の多様性の把握を行ないます。運営側が、そのコミュニケーション・フィールドを行なう上で、専門的知識をつけて、なおかつ議題がどのような広がりを見せるかということのある程度予測する必要があるだろうということで、3つ目のポイントが入っております。

ここまで決まったところで、「市民パネルの募集、決定」ということで、コミュニケーション・フィールドの正当性を保つために、どのように選抜すればいいかということを考えます。

ここまで決まってから、ようやく「ワークショップの内容、段取りの決定」がされるという段階になっています。

(スライド8) では、それぞれの事例を紹介させていただきます。

まず1つ目が、コンセンサス会議です。

観察者の目的は、日本でもコンセンサス会議が適用できるかの確認がしたかったというところが一番メインになります。元々コンセンサス会議というのは、デンマークで始まったものなのですが、これはデンマークの市民性が大きく関係しているのではないかと意見が多くありましたので、日本でも同じようにできるのかどうか確認することが目的となっています。

ではそのために、コミュニケーション・フィールドではどういうことをするのかというと、このときはインターネットというテーマを取り上げました。そして、インターネットに対して、市民の考えを含めた報告書を作成することを目的としました。報告書の内容は、コンセンサスにたどり着いたのはどこか。また、その中で提言できるのはどういうところなのか、ということになっています。

プログラムとしては、専門家のプレゼンがあって、その後、議論を踏まえた上で市民が質問項目を作成し、それに対して専門家が回答し、また市民が議論した上で報告書の作成を行なうという形になっています。

結論としましては、日本でも十分に議論が深まり、適用は可能であったと。一方で、専門家と市民の対話の時間が少ないという問題が挙げられていました。

(スライド9) この問題点を踏まえて、ディープ・ダイアログというものが開かれました。

先ほどのコンセンサス会議の課題であった、対話の場の少なさを解決する手法を開発しようというのが、観察者の目的となっています。

先に3つ目のポツを見ていただきたいのですが、手法としては、「グループ討論」という形が取られました。専門家から質問に対する回答があった後に、専門家と市民、ファシリ

テーターの方を含めまして、グループ討論をすることによって、対話の時間を増やそうという手法です。

コミュニケーション・フィールドのテーマは、脳死・臓器移植ということになっております。

結論としては、対話の時間は増えたのですが、市民は対話の時間に満足していません。これは、もっともっと時間がほしかったという意見が、市民から多く聞かれたということになっています。

また、報告書が専門家の意見に近くなったという結論が得られています。これをいいことと捉えるか、悪いことと捉えるか、非常に考察をされていたのですが、専門家からたくさん情報を市民の方が受け取ることができたと捉えると、非常にいい結果であると捉えることができます。一方、専門家の意見に近くなってしまった、つまり市民の独自性が失われてしまったと考えると、いい結果と捉えることはできないというところで、考察が含められております。

(スライド 10) 次の事例がシナリオ・ワークショップです。こちらについて、先日の議論において、私が間違っただけを言っていたので、注意して聞いてください。

まず観察者の目的なのですが、参加型手法が広がっていく中で、日本で参加型手法イコールコンセンサス会議というような認識が非常に広まってしまったというところに問題意識を持っています。それに対して、コンセンサス会議以外の手法もあるということをしっかり出したいというのが目的としてありました。

いろいろある参加型手法の中でなぜシナリオ・ワークショップなのかということですが、これは三番瀬の埋め立てという、扱ったテーマの問題であると。三番瀬の埋め立てというのは、問題に対する利害対立が非常にあったということで、シナリオ・ワークショップが優れているというお話です。三番瀬というのは東京湾の埋立地なのですが、3つの市町村にまたがっておりまして、非常に強い利害対立があったということで、シナリオ・ワークショップを適用しました。

コンセンサス会議とシナリオ・ワークショップの違いは、コンセンサス会議は問題点を共有することが目的となっているのですが、シナリオ・ワークショップは共有してから、次に行動計画であるとか、未来像を皆で作らしようというところが目的ということで、次のステップであるというところが違います。

プログラムなのですが、まずシナリオを4つ紹介します。これは専門家が作ったシナリオです。その後、そのシナリオに対する検討を行ない、対立の整理を行ないます。その後、では一体、共有できる未来像、皆が望む未来像というのはどういうところかというビジョン要素を作りまして、その後に必要な行動計画の作成を行ないます。

ここで、先日はなかった補足なのですが、先日、シナリオが必要ないのではないかという意見が出たのですが、このシナリオ・ワークショップの由来は、やはり最

初にシナリオを提示するところにあります。

(スライド 20) スライド 20 を見ていただきたいのですが、これはデンマーク調査報告書という報告書の中から、シナリオ・ワークショップの手法の一部を、簡単に抜粋したものです。

シナリオ・ワークショップについて詳しく触れますと、上の図のところで、役割別ワークショップと混成ワークショップという書かれ方をしていると思います。

役割別ワークショップでは、セクター別に議論を行ないます。例えば、利害関係者が市民、企業、行政である場合は、市民でグループを組む、行政でグループを組むという形になります。

まずシナリオが提示された後に、その役割別ワークショップを行なうことによって、各セクターごとが、そのシナリオに対しての批評を行ない、対立点、トレード・オフの関係をしっかり見ようと。そうすることによって、論点の整理をしていこうという目的がシナリオ・ワークショップの最初の段階にあります。

先日、シナリオは必要ないのではないかという話があったのですが、シナリオ・ワークショップの要諦はここにあるということ、批評フェイズに多くの時間が使われているというところは触れておきたいと思います。

(スライド 10) 戻りまして、このシナリオ・ワークショップが行なわれた結果としましては、利害対立のある課題に関して、多様な関係者を含めた中でも、ゆるやかであるが、一定の合意を得、未来像と行動計画を生み出すことができたという結果が得られています。

(スライド 11) この後のスライド 11、12 には、3 つの事例に総合して考えられる注意点、意識すべき点をまとめていますので、簡単に紹介させていただきます。

まず、参加型イベントをどのように評価すればいいかという指標を、若松さんが書いてあります。1 つ目が、誰が討論するのか、その参加者の正当性。2 つ目が、どのような課題を扱うか。その課題は社会にとって適切か。3 つ目は、参加型イベントへの情報入力は適切か。4 つ目は、イベント運営は公平、公正に運営されたか。5 つ目に、成果は課題に対して適切に答えているか。このような評価軸があるので、参考にすればいいかなと思っております。

(スライド 12) 次に、設計段階の留意点を挙げています。

会議で扱うべき課題を模索する段階の留意点として 3 点。扱う課題の広がりや狭すぎないこと。異なった型の技術の評価し、選ぶことに焦点を当てること。課題に関わって参加者が活動する可能性を持っていること。この 3 点が挙げられています。

また、場の設計に関しても、コミュニケーション・フィールド開催への肯定的な社会的

認知の必要性と、公平性の確保、この 2 点は非常に重要視するべきだということが書かれておりました。

(スライド 13) 続いて話題の 3 つ目、従来の手法と本プロジェクトにはどのような違いがあるのかということ、最後に説明させていただきます。

主に違う点として、目的、参加者、対話プロセスの 3 つがあるので、それぞれに焦点を当てて話していきたいと思います。

(スライド 14) まず目的です。

下の表を見ていただければ分かると思いますが、従来型は、観察者の目的は、いかにして市民参加を可能にするかという目的になっています。それに対して、本プロジェクトにおいては、専門家と市民の相互作用を見たい。特に、これの意味するところとしては、専門家と市民が対等の立場で参加するためにどういうことができるのかを考えたいというところで、今までは市民だけが参加していたものが、今回は市民と専門家の両方が参加するという点で、今までとはかなり観察者の目的が異なっているといえます。

そして、この観察者の目的に対して、コミュニケーション・フィールドの目指す目的が設定されます。従来型では、市民参加を可能にするために、市民の意見が含まれたものを作り出しましょう。そしてそれがしっかり効力を持つものだというを確認しましょうということが、コミュニケーション・フィールドが目指す目的となっております。

そして、参加者の動機も、自分たち（市民）の意見が反映されるというところで持たせていたと。

一方、本プロジェクトでは、「フォーラム」が目指す目的がまだ設定されていません。専門家と市民が対等な立場で参加するために、どのようなフォーラムを開けばいいのかということをもまず考える必要があるのではないかと思います。

そして、そのために参加者にどのような動機を持っていただければ参加していただけるのか、いい結果が出るのかということを考えていく必要があるのではないかと考えております。

(スライド 15) 2 つ目の問題は参加者です。

先ほど言いましたように、従来型の参加者は市民だけだったのに対して、本プロジェクトでは市民と専門家という 2 つの参加者がいます。この参加者の正当性をどのように確保するかという問題で、従来の参加型手法におきましても、正当性をどのように確保すればいいのかというのは、どの方も非常に悩まれておられて、明確な答えは出ていないという点があります。まず、この点を考えていかなければならない。

さらに、専門家についての参加者の正当性の確保は、今までなされたことがないということで、こちらは今回初めて出てくる議題ですので、しっかり考えていく必要があると思



っております。

(スライド 16) そして、3つ目が対話プロセスになります。

まず従来型は、基本的な対話プロセスとして、情報提供、または質疑応答という形の対話プロセスが取られております。そうしますと、一応質問と回答という形で、相互関係はあるということは今までは述べられているのですけれども、情報の流れは専門家から市民という片方向に、偏りが生じております。このような対話プロセスが行なわれますと、プロセスによって、専門家－市民という構造がむしろ明確化してしまうのではないかという問題があります。

それに対して、本プロジェクトで目指すのは、専門家と市民という両者が一緒に参加する場を作ろうということなので、では、こういう場を作ろうといったときに、従来の情報提供型の対話プロセスだけでいいのか。それ以外のプロセスを使うとしたら、どういった形のプロセスを行なえば、情報の流れを双方向にできるのかということを考えていく必要があるのではないかと考えております。

(スライド 17) 最後に、フォーラムを設計する上で検討すべき項目をまとめています。見て分かる通り、未定が多いということになっております。

先ほど、社会調査グループの討論で、市民パネルをどう選ぶかということが議論されていたと思うのですが、やはりこの設計段階は、基本的に上から下に進んでいくもので、おそらく、フォーラムで何をめざすのかということがしっかり決まってきた、初めて市民パネル、専門家の募集というのが、どのように選ぶかということが決まってくるかと思えます。

ですので、目下、フォーラムの目指す目的をしっかりと考えていこうというのが、フォーラム検討会議の課題となっております。

(スライド 18) ということで、長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。

(神崎) どうもありがとうございました。先日は、竹中さんの説明の後に、実際にフォーラムをどのように設計するかということを含めて、フォーラムの目的をどうするかを含めて、自由に討論を行ないました。その結果が、まだ未完成ですが、3-1の議事録に書いてあります。

実際に行なわれた手法のテクニカルな情報、どのような方法で行なったかというのを調べていただくことになっております。これが1つポイントです。

他にいろいろなご意見が出されました。今までいろいろ開催されてきた参加型のコミュニケーション・フィールドについても、その研究成果がどのように活かされたかということが、参加した市民の側から見えなくなっているというところが、今後検討されるべき課

題なのかもしれないというご指摘がありました。そういうことを利用することを含めて、新しくフォーラムの目的を作ったほうがいいのかもしれませんが、そこはまだ、はっきりしていないところです。

自由に討議したのですが、まだこれからというところが多くて、あと 7 回ほど会合を開いて、フォーラムの目的、それから参加者を決定するためのいろいろな要件を検討していくということです。とりあえずは、12 月のアンケートに活かされるような意見を議論しようとしているところなのですが、どうぞ。

(土田) スライド 16 についてですが、本プロジェクトは専門家と市民とで矢印がぐるぐる回るという形になっています。

話す内容は、サイエンス・カフェのように原子力の専門的な知識について話すのであれば、左側にならざるを得ないですね。情報というのは、あるところからないところに向かって流れるので、逆は絶対に起きない。とすると、原子力の専門的な知識について話し合うというのであれば、専門家から市民のほうに流れるしかないですね。

ところが、今回我々がやろうとしているのは、ムラというものをどうするのかとか、専門家の人たちがどう見られているかということになりますので、そういった話題に対しては、原子力専門家は専門ではないわけです。あなた方がそういう組織作りをしていることが、市民からどう見られているか、ということが題材となるとすれば、むしろ専門家のほうが知識がないわけですから、市民から専門家に情報が流れるわけです。

ですから、無理やりポンプでも作って水を流すというような発想ではなくて、自然と市民のほうが上のほうになるというか、高いほうになって、そこから専門家のほうに情報が流れるようなトピックを探す、という形にすれば、うまく回るのではないかなど、聞かせてもらっていました。

—— 目的設定がまだ明確ではないというお話が、とても不思議だったのです。

このプロジェクトの目的は、原子力ムラの境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行をした上で、いわゆる社会技術としてどのような政策提案ができるかということを確認に作る。その社会技術としての政策提案を、政府が実行するだけではなくて、では専門家集団はどう実行できるのか。民間はどうできるのか。企業はどうできるのか、というのをそれぞれまた考えて、共有するなりしていくとか、そういうことがもう目的だと思うのです。

なぜ目的が決まっていないとおっしゃったのか、教えていただければと思います。

(神崎) 検討すべき項目の一番上の「観察者の目的」ははっきりしています。それは今おっしゃったとおりです。

決まっていないのは、実際に行なわれるフォーラムをどういう目的で運営するかという

ことです。そこはまだはっきりしていないということです。

—— 分かりました。それならば、もう目的ははっきり決まっているわけですので、その前に、何回の会合を開き、何回どういうことをやるのかということ、バックテスト的にやれば、その中で、どこまで共有したらいいかということが見えてくると思うので、そういうことを1回ちゃんと緻密に皆さんでやったほうがいいかな、と思います。

(神崎) そうですね。フォーラムの1回から5回までの設計をしなくてはいけない。それを今年度、2月までにしなくてはいけない。それをこれから詰めていくということです。

—— 確認を2点ほど。このフォーラムは、説明会ではないということだけは明らかに違いますよね。それから、意思決定過程でもないですよね。意思決定過程のシミュレーションをするわけでもないですよね。この点だけを明確にさせていただければいいわけですよね。

(神崎) それははっきりしています。

—— 先ほどこの資料をご説明いただいたときに、感じたことがひとつあるので、それだけ申し上げたいと思います。

私は環境学習のところから、こういう参加手法の設計をして、実践をするというのをずっと専門にやってきたのですが、言葉の使い方として、スライド5の表を拝見していただきたいのですが、参加・協働・権限委譲のところ、2つ項目があります。「左側が認識を共有する」とあって、右側が「共同して創出する」となっています。

左側の「認識を共有する」というのが「参加」によってできることで、右側になると参加だけではなくて「参画」の過程になる、と整理すると、もっとそこが明確になるのかなと思いついていました。やはり、参加をして話し合っ、認識を共有するだけではなくて、その解決策に向けて企画段階から一緒にしっかり入って、共に企画をするという、それで一緒に立ち位置になると。

一緒に立ち位置になったら、そこで責任を共有して、共に作っていくという過程が生まれることが大事だと思うのです。それを強調するのだったら、さらに右側にもうひとつマスを作っていて、「責任の共有」と、「協働してそれを実現する」という過程が3番目にあると、今回やろうとしていることのイメージが見えてくるかなという感じがしていました。

(神崎) ありがとうございます。

(木村<sub>浩</sub>) 確認ですけど、認識を共有することと、参画というところですね。

—— 「参加」、「参画」、そして「共創」。共に創っていく、みたいな。

ですから、シナリオ・ワークショップ自体は、「参画」の過程だと思うのです。一緒に企画を作っていく。

そのもうひとつ右に、責任を共有しながら作っていくという過程が入ってくるといいと思います。そこが今、まだまだ社会で遅れている。遅れているというか、そこになかなかいかないというところに大きな課題があるのかなと思います。

(神崎) つくるというのは、実際にものを作り上げるという意味ですか。

—— いろんな意味です。

(木村<sup>浩</sup>) 例えば、リスク・コミュニケーションで言えば、リスクを一緒に管理していく。そういうシステムをきちんと作っていくということです。

—— いろいろなことがあると思うのです。ものを作るのもあるかもしれないし。解決するためのプログラムを作って、一緒にそれを実践していくとか、そういうのもあると思います。いろいろなものを、共に、机の上の話し合いから、現実に移していく。その過程だと思います。

(木村<sup>浩</sup>) 今の意見にプラスすると、今回実はこのプロジェクトで、まず何をしなければいけないかという、「まともに参加する」ということを考えましょう、ということをお願いしたいのです。

それができないうちに「参画」「共創」という話をすると、結局、専門家がやっていた今までのフレームワークに市民が張り付いているというイメージになってしまう。それをどうにか壊したいなという思いがあるのです。

なので、最初の「参加」というところ、お互いに尊重して参加できるようなフレームワークが、どうしたら作れるのかというところを、実は見直したいというのがあります。

今のお話は、私の中ではしっくり来ました。

—— もう 1 点だけ。私は先ほど「共創」といいましたけれども、それよりも「協働」という言葉のほうがいいかもしれません。「参加」、「参画」、「協働」と。そのほうが、言葉としては皆さんよく使っていますし。

—— 市民参加については、大阪大学のコミュニケーションデザイン・センターが最先端を走っております。ここに引用してある平川さんや若松さんも含めて、私も参加している

のですが、毎年夏に市民参加の合宿を行なっております。そこでいろいろな参加の方式が紹介されていて、それらの方式については、国連がまとめたものが決定版で、およそ 140 ぐらいあったと思います。その中で、3 つがここでは選ばれていますが、多少は違うのですけれども、基本的には似たようなものだと思うのです。

それから、その大阪大学のワークショップ、合宿で泊りがけで、平川さんや若松さんが隣にいるという、とても色濃いメンバーでやっているのですけれども、結果から申しますと、これまでのコンセンサス会議や、様々なワークショップはほとんど失敗であったと。それは日本国内外全部含めてです。そうはいつても、やはり参加は大事だよねということと、それから、参加の過程でいろいろな論点が争点化、焦点化されて、そしてその論点に対して理解が深まるという、そこまでは何とかいけるねというのが、大雑把なところだと思うのです。

例えば、スライド 19 の表で言う Collaborate や Empower というのは、論点次第によるわけです。例えば、国土交通省がやっている町づくりで、この町にこんな道路をこれから通そうと思います、などの計画は、住民参加で、「いや、この道路はこっちじゃなくて、こっちに通す」、あるいは、「道路そのものは作らないほうがいい」というようなことを住民参加で考えて、その決定がそのまま政策に反映できます。だけど、原子力政策ではそんなことはまったくできないのです。これまでの通り、言いつばなしだったということ。

それで、今回の場合の論点は、ムラを越えるということ。これは画期的なテーマだとは思いますが、初めてのことなので、おそらく試行錯誤の段階だと思います。ですから、おっしゃるように政策提言までできればいいのですが、おそらくそんなところまでは絶対にはいかない。手探りで、どうやら 1 歩や 2 歩ぐらい、登山口のところまで登れたかな、ぐらい。ムラって何、ムラってこんなところではないの。そして、専門家はどこがいけなかったのかというのを、専門家が内省的に考えるようなところまでいければしめたものであって、とても提言まではいかないと思います。まあ、そうはいつても、これはこれでいいと思います。

それから、シナリオ・ワークショップは、基本的には未来のまちを作るときの手法として考えられたものですから、今回はこれを使わないほうが良いと思いますよ。

(竹中) ひとつよろしいですか。今までのものは失敗だったとおっしゃいましたが、私はこの本を読んだのですよ。この本の中には、失敗だというようなニュアンスはあまり書かれていないのです。当然ですけれども。

—— 飲むと違うのですよ。若松さんも平川さんも。

(竹中) 私は、失敗であるという本を非常に読みたいと思っているので、国内の本でそういうものがあれば、ご紹介いただければと思ったのですが、どうでしょうか。

(土田) そういうのを書くと、売れない。

—— 失敗というのは、具体的にはどういうことが失敗だったのですか。

—— 結局何もできなかつたよね、と。最近、小林傳司さんが、参加疲れ。これだけ一生懸命やって、一体何になったの、と。市民参加なんかは間接民主主義でやっているのがもうせいぜいで、あとは専門家支配というテクノクラシーが科学分野では強力にやっていますから、そういうことに対して市民参加などは、歯を立てられなかつたというのが現実だよなというような。繰り返し言としてはそういうことです。

だけど本でそんなことを言うと売れないし、お金が取れないし、コミュニケーションデザイン・センターの存立意義そのものがなくなりますから、そんなことは言いません。そういうのは全部居酒屋で言います。

(竹中) 今後設計する上で、どういう場合はどういう失敗をするか、ということが分かると、非常に設計しやすくなると思うのですけれども、どういうところを参考にしていけばそういうことが分かるかと。

(土田) いや、それは参加しないと駄目ですよ。その場で本音で語っているところに入らないと。

—— 今後のいろいろな話し合いが面白くなりそうだなと思います。いくらやっても市民参加なんてできなかつたよという前提の方と、市民側から一生懸命活動している者が、一緒にこのプロジェクト入って、現実は何なのだろうというのをこれからやろうとしているわけなので、とても面白いなと思います。

—— 参加することに意義があるのであって、結論を導き出すことはあまり。お互いが参加し合えば、それでいいのではないのでしょうか。

—— 結論なんて山の10合目で、今回は1合目まで行ければせいぜいですよ。

—— 用語がもうひとつすっきりしないのですが、ここでは専門家と市民という分け方をしているのですよね。テーマが原子カムラを越えるということは、原子カムラとムラ以外の人ということになりますよね。

(土田) ですから、私の考えですけれども、専門家という用語をもう我々は使わないほ

うがいいと思います。ムラ人と、ムラ人以外のほうが。

—— そうしないと、先ほど土田先生がおっしゃったように、一方方向の議論しか出ないのではないかと思います。

(竹中) ムラ人と市民。

(土田) ムラ人と市民、それでいいのではないですか。

—— 先ほど、失敗という表現がありましたよね。何ををもって失敗するかというと、せっかく市民が集まって提言しても、それが反映されなかったのを失敗とするのか。集まりそのもののやり方を失敗するかによって違いますけれども、反映されなかったのを失敗とすれば、失敗された根拠というのが、強固な内集団だったり、ムラづくりだったり、権限だったりしているわけではないですか。そこをあぶりだすのが、おそらく、今回の目的なのですよ。

—— いや、そこまでいくかな。

—— それを構成しているのは、実は専門家といわれる原子力界の意思を決定している人たちの、ここ(頭)なのです。ここを変えない限りは、新しい原子力の道はないというように考えて、このプロジェクトはあると考えたほうがいいと思います。

(木村<sub>浩</sub>) 市民参加がなぜ今までうまくいかなかったのかを、実施してきた人たちにインタビューしていかないと駄目かもしれないですね。そういうのを入れてもいいかもしれないですね。

(土田) できるのであれば。オフレコですからと。議事録も残しませんからと。

(木村<sub>浩</sub>) そうか、オフレコにしないといけないのか。でも、そういうことをやっていると、同じ失敗をしてしまいますよね。

—— 研究者の数も、あまり多くないですからね。全員に聞いてもいいかもしれない。

(木村<sub>浩</sub>) そうですよ。

(土田) 北村先生だって、アイデアをお持ちだと思いますよ。そういうところから聞

けばいいのではないですか。

(木村<sub>浩</sub>) その辺は間接経費とかから工面してやったほうがいいかもしれない。

—— ただ、大阪大学の STS (科学技術社会論) グループは、基本的には反原発に完全にシフトしていますから。八木さんと北村さんを除いて。ということは、市民参加が十分ではないということは、要するに、反原発が政策に十分に反映されていないという、その 1 点ということになりますので。その辺りは、あらかじめ心づもりしておいたほうがいいかもしれません。市民の気持ちが反映されるということは、原発 0 が実現できることなのだ、というような路線を敷きつつありますので、それは覚悟しておいたほうがいい。

—— その辺りが難しいところなのは、今、本当に普通の市民で、そのように明確に考えている人は少ないと思うのです。市民イコール反対派みたいな形でいたからこそ、うまくいかなかったのではないかというような意見も、ずいぶん出てきているのではないかと思います。ですから、なぜ今までうまくいかなかったかという調査の中で、そういういろいろなことが、本音ベースで出てくるといいかなと思います。

(木村<sub>浩</sub>) それは面白いですね。私も調査とかをしていると、なんとなくそんな雰囲気かな、とは思うのですが、例えばどういう人たちがそういうことを言っていたりしますか。

—— ええと、どちらのことを言えばいいのですか。

(木村<sub>浩</sub>) 要は、いわゆるプロ市民みたいな人たちが主張していることが通じていなかったということに対して、それが市民参加が失敗したと言っているのではないかというような論調。

—— 私がそれを如実に感じたのは、日本学術会議が、今回原子力委員会の求めに応じて、報告書を出されましたよね。それを読んだときに、いろいろ違和感がありまして。なぜそういう報告書になったのかを、学術会議でそれを担当した方に伺ったら、「強固な反対派と一緒に席についてもらうためには、どのように原子力政策を変えたらいいか。どうすれば一緒にテーブルについてくれるのか。ということを議論して出した報告書があれです」とおっしゃったのです。

そのときに、強固な反対派ではなくて、社会の中で原子力を使っているということを最近気づいた普通の人たちが、原子力を使うのだったら安全に運転してほしいし、あんな事故が起こったのだから、もう少し少なくしてほしいし。だけど、自分たちは社会人として、



高レベル放射性廃棄物の処分にもきちんと参加をして責任を持っていかなければいけない  
なとか。そういう普通の市民というのは、お話をするととてもたくさんいるのですね。そ  
ういう普通の市民の声が、どうすれば原子力政策の中に反映できるのだろうかというこ  
とを、よく考えるのですね。

ですから、強固な反対派みたいな市民の声だけではなくて、普通の市民の声が、こうい  
う分野で生きていくことで、もっと普通のコミュニケーションが成り立つのではないかな  
と非常に思っていたものですから、そんな意味で先ほど発言をしました。

—— その学術会議というのは、高レベル放射性廃棄物の埋め方が悪いとか、そういうや  
つですね。

—— そうです。

—— 市民の話に関しますと、今までは、反対しないのは賛成だったのですね。実はこれ  
からは、市民が明確に賛成しなければ進めないような方向にしていけば、普通の市民の  
声が入ってくると思うのですよ。その考え方の違いだけでおそらく、まあ考え方の違い  
だけで変わるとは思いませんが、そういう基本精神の違いが大きいと思います。

—— 私は今のご意見は大変重要なことだと思っていて、2010年10月8日に、規制  
情報会議というものが初めて開かれて、そこでコミュニケーションのセッションがありま  
した。そこで、今のようなお話がありましたね。

要するに、役所は、そういうプロ的な反対派の人に焦点を当てたような資料しか作らな  
い。今おっしゃられた、普通の市民感覚で疑問を持っている人たちがその資料を読んでも、  
何も分からない。

あの場で、保安院の方が説明した話を聞いて、そこに市民代表で座っていた方が、「初め  
てこういう資料を拝見しました」という話をされたのですね。「どうしてそういうものを作  
ってくれないのですか」と、柏崎の有名な方がおっしゃったのですけど。

その答えは簡単明瞭なのです。役人が、普段何を考えて仕事をしているかという、訴  
訟リスクしか考えていないのです。訴訟されて、裁判所に引きずり出されたときに、自  
分がどのように反駁できるか。つまり、プロの反対派が訴訟をしてくるわけですね。そう  
いうときにどう反論できるか。そういうことしか日常考えていないのです。ですから、サイ  
レントマジョリティーの人たちのことは、何にも日常の仕事では考えていないのです。

だから、作る資料も、そういうプロの反対派に対して、あるいは将来の訴訟のときに、  
どう自分の政策を正当化するかということしか、日常考えていない。だから一般の市民の  
人たちが見ても何にも分からないし、我々が見ても、何でこんな資料になっているのかな  
と思うぐらい、ひどいと私も思いますね。

そのときに、つくづく、その規制情報会議のコミュニケーションのセッションは大変よかったですと思ひまして。直後に事故が起きてしまって、その続編がなくなっているのですけども。

だから今回も、この企画の中で、そういうところを少し抉り出せると面白いなど、私は思います。

(木村<sub>浩</sub>) 完全にムラの組織ですよ。

—— そう。ムラの中には、そういう問題があります。

私も昔メーカーにいて、東大に来てこういう勉強をするようになって、たまたま役所出身で、私と同じような立場で勉強する方とご一緒して、役人が普段何を考えて仕事をしているかという話を日常の会話で聞くようになって、それがよく理解できるようになったのです。

だけどこれは、日本の原子力に限った話ではないと思っています。他のフィールドにも通じるところがあるのではないかなど。だからそういうことを、もしこの業務の成果として、少し何か提言ができると、それは大変意義のある提言になる可能性がありますね。世の中の人にわかる、聞こえるような形でそれを出さないといけないと思います。

—— いろいろしゃべって申しわけありませんが、原子力政策への市民参加が、どうすれば反映できるかという大目標はあるのだけれども、そんなことはここではできないのです。それは大きすぎる。これまでずっと、いろいろな人が取り組んできて、それはほとんどできなかったから、5回くらいフォーラムをやったって、できっこないのです。

それで、今回は原子カムラを越えるということですから、そういう大目標は向こうに見ながらも、やれることはおそらく、原子カムラと呼ばれるところの、一体どこがいけなかったのかとか、それがいけなかったとするならば、どうすれば変えられるのか、というような、論点をいくつか具体的に絞ったほうがいいと思うのです。そういう意味で改革点と。それからもうひとつは、幻想に基づく誤解もあったと思うのです。だから、それはどのように説明すれば誤解が解けるのかというような話になります。そういったところに論点を絞って、一般の人から苦情なり意見を聞いて、変えるべきところを探すと。そういうことからだと思います。

—— 今回の調査で、実際には今のお話のように、具体的なところ、どう動けばいいのか、どこを変えたらいいのかということが皆で共有できることが大事だと思うのです。

私が先ほど政策提言と申し上げたのは、この業務は国の税金を使っているわけですので、今後税金の使い方をよくするためにも、最後にそういう具体的なことを踏まえて、その中から何か提言を出すべきではないかということです。国レベルなのか、都道府県レベルな

のか、それぞれの専門においてなのか、最終的にはそういう部分まで、研究者たちの責任としてちゃんと政策提言を出すと。そのくらいはぜひ、という意味で申し上げました。よろしくをお願いします。

(木村<sup>浩</sup>) このプロジェクトは最終的にそういう方向に行ってくださいといわれていますし、そこを期待されているところは大きいので、それはやっていきたいと思います。

それでは、いろいろなご意見ありがとうございました。貴重なご意見もたくさんあったと思いますので、活かしていきたいと思います。竹中君も、新たな仕事がたくさんできたということで、彼も喜んでいると思いますので、引き続きご指導のほど、よろしく願いできればと思います。

#### 4. その他

(木村<sup>浩</sup>) では最後に、次回以降の日程を紹介して終わりにしたいと思います。

次回は12月7日(金)、時間は今日と一緒です。場所はまだ未定ですが、決まり次第連絡いたしますので、よろしく願いいたします。

第3回は来年の2月20日、第4回は3月22日です。こちらも予定を空けていただいて参加していただければ幸いです。

ということで、本日は第1回の全体会合でしたが、非常に深い話ができて、これはいけないのではないか、もしくは話が大きくなりすぎて大変なのではないかと両方思っていますけれども、これから頑張っていきたいと思いますので、また皆さんからいろいろな意見をお聞かせいただければと思います。今日はどうもありがとうございました。

以上